

大阪府 茨木市

平成22年度発掘調査概報

－個人住宅建築に伴う発掘調査報告－

平成23年3月



茨木市教育委員会



はじめに

私たちが暮らしているこの茨木は、北半分は丹波高原の老の坂山地の麓で、南半分には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境の土地として、はるか昔から多くの人たちが生活してきました。そうした人びとの生活は風習として現在伝えられ、また人びとの生活した足跡は、土に埋もれた文化財として今に残されてきました。

このような先人たちの生活や文化は、現代の私たちの生活の基となるものであり、また、土の中に残された遺構や遺物は、過去の人びとの生活を知る手がかりとなる貴重な文化遺産として、次代に残し伝えていくべきものであります。

しかし、市内においては、住宅開発をはじめ様々な開発が計画されており、人びとの貴重な文化財を現状のまま残すことが困難になっています。

そのため、文化財を記録して保存し、また出土した遺物や遺構などの資料から古代の人びとの生活像を捉るために、住宅建築をされる方々のご協力をえて、建築に先立ち発掘調査を実施し、文化財の記録保存に努めています。

平成22年度はおもに茨木遺跡、牛札遺跡等の調査を実施し、本冊子はそれらの発掘調査について概略を述べたものです。いずれの調査地からも先人達の生活を知るうえで貴重な遺物、遺構が出土しており今後の研究が期待されます。

終わりになりましたが、調査にあたって惜しみないご協力をいただきました関係の皆様に深く感謝するとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保存・保護に一層の温かいご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月31日

茨市教育委員会
教育長 八木 章治

目 次

はじめに

例 言

茨木市内遺跡分布図

平成22年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

1. 牟礼遺跡(中津町855-1)	1
2. 茨木遺跡(本町1399)	3
3. 茨木遺跡(大手町1594)	6
4. 安威城跡(安威二丁目2012)	8
5. 茨木遺跡(片桐町1071-4)	12
6. 常楽寺跡(藏垣内三丁目408)	15
7. 牟礼遺跡(中津町848-849)	18
8. 東奈良遺跡(天王二丁目589-29)	21
9. 中条小学校遺跡(奈良町584-4,584-8)	23
10. 牟礼遺跡(園田町14-33)	27
11. 春日遺跡(春日五丁目46-7)	30
12. 太田茶臼山古墳(太田三丁目158-1)	33
13. 中条小学校遺跡(下中条町町122-4,122-6)	35
14. 牟礼遺跡(中津町855-3)	38
15. 耳原遺跡(耳原二丁目487-14,494-8)	40
16. 目垣遺跡(目垣二丁目746-6,743-7)	43
17. 溝昨遺跡(五十鈴町245-9)	47
18. 太田城跡(太田一丁目617-5)	49
19. 上中条遺跡(上中条一丁目61-3)	52
20. 倍賀遺跡(春日五丁目49-15)	56
21. 茨木遺跡(元町1530-9,1530-10)	59
22. 安威城跡(安威二丁目2013,2324)	62
23. 目垣遺跡(目垣一丁目8-6)	64

例　　言

- 1 本書は、平成22年度国庫補助事業（総額2,748,760円、国庫50%、市費50%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。
- 2 平成22年度事業として、平成22年4月1日から平成23年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
- 3 発掘調査は、調査員 中東正之、宮本賢治、関 梓、富田卓見が担当した。整理・報告書作成業務は、平成22年3月末日まで行った。本書は各調査担当者が執筆を行ない、編集は上田哲平が行なった。整理作業は、高橋公子、堀澤照美、下口法子、西坂泰子、和田恵津子、高瀬隆治、西井貞善、辻本祐布子、菅原麻里、横尾知明が行ない、遺構トレイスは初代絵理が担当した。また、国庫補助に関わる事務は、参事 池田育生、上田哲平、黒須靖之が担当した。
- 4 本書で使用する標高は、すべてT.P.（東京湾標準海水面）で表し、各挿図に掲載した方位表記のうち、M.N.は磁北、Nは真北を示す。また、平面直角座標第IV系に準じる。
- 5 出土遺物及び関係書類・図面・写真等は、茨木市教育委員会・茨木市立文化財資料館
〒567-0861 大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号 TEL072-634-3433 で保管している。
- 6 遺構・遺物等の記載は、土層及び遺物の色調については『新版標準土色帖』（小山・竹原編）を使用した。

図版目次

第1図	1.牟礼遺跡 調査位置図	P. 1	第40図	10.牟礼遺跡 調査位置図	P. 27
第2図	1.牟礼遺跡 調査区配置図	P. 1	第41図	10.牟礼遺跡 調査区配置図	P. 27
第3図	1.牟礼遺跡 南壁断面柱状模式図	P. 2	第42図	10.牟礼遺跡 平面・断面図	P. 28
第4図	1.牟礼遺跡 発掘調査風景	P. 2	第43図	10.牟礼遺跡 発掘調査風景	P. 29
第5図	2.茨木遺跡 調査位置図	P. 3	第44図	11.春日遺跡 調査位置図	P. 30
第6図	2.茨木遺跡 調査区配置図	P. 3	第45図	11.春日遺跡 調査区配置図	P. 30
第7図	2.茨木遺跡 遺跡平面・断面図・遺構断面図	P. 4	第46図	11.春日遺跡 平面・断面図	P. 31
第8図	2.茨木遺跡 発掘調査風景	P. 5	第47図	11.春日遺跡 発掘調査風景	P. 32
第9図	3.茨木遺跡 調査位置図	P. 6	第48図	12.太田茶臼山古墳 調査位置図	P. 33
第10図	3.茨木遺跡 トレンチ配置図	P. 6	第49図	12.太田茶臼山古墳 トレンチ配置図	P. 33
第11図	3.茨木遺跡 遺構平面図・南壁断面図	P. 7	第50図	12.太田茶臼山古墳 東壁断面図	P. 34
第12図	3.茨木遺跡 発掘調査風景	P. 7	第51図	12.太田茶臼山古墳 出土埴輪	P. 34
第13図	4.安威城跡 調査位置図	P. 8	第52図	12.太田茶臼山古墳 発掘調査風景	P. 34
第14図	4.安威城跡 調査区配置図	P. 8	第53図	13.中条小学校遺跡 調査位置図	P. 35
第15図	4.安威城跡 遺構平面図・土層断面図	P. 9	第54図	13.中条小学校遺跡 調査区配置図	
第16図	4.安威城跡 調査風景・出土遺物	P. 10	第55図	13.中条小学校遺跡 平面図	P. 36
第17図	4.安威城跡 市内城郭位置図	P. 11	第56図	13.中条小学校遺跡 土層断面図	P. 37
第18図	5.茨木遺跡 調査位置図	P. 12	第57図	13.中条小学校遺跡 発掘調査風景	P. 37
第19図	5.茨木遺跡 調査区配置図	P. 12	第58図	14.牟礼遺跡 調査位置図	P. 38
第20図	5.茨木遺跡 出土遺物	P. 13	第59図	14.牟礼遺跡 調査区位置図	P. 38
第21図	5.茨木遺跡 遺構平面図・土層断面図	P. 14	第60図	14.牟礼遺跡 調査区平面図・土層断面図	P. 39
第22図	5.茨木遺跡 遺構検出状況	P. 14	第61図	14.牟礼遺跡 完掘状況・出土遺物	P. 39
第23図	6.常楽寺跡 調査位置図	P. 15	第62図	15.耳原遺跡 調査位置図	P. 40
第24図	6.常楽寺跡 調査区配置図	P. 15	第63図	15.耳原遺跡 調査区配置図	P. 40
第25図	6.常楽寺跡 平面・断面図	P. 16	第64図	15.耳原遺跡 発掘調査風景	P. 41
第26図	6.常楽寺跡 遺構検出状況	P. 17	第65図	15.耳原遺跡 遺構平面・断面図・遺物写真	P. 42
第27図	7.牟礼遺跡 調査位置図	P. 18	第66図	16.日垣遺跡 調査位置図	P. 43
第28図	7.牟礼遺跡 調査区配置図	P. 18	第67図	16.日垣遺跡 調査区配置図	P. 43
第29図	7.牟礼遺跡 調査風景・出土遺物	P. 19	第68図	16.日垣遺跡 発掘調査風景	P. 44
第30図	7.牟礼遺跡 遺構平面図・土層断面図	P. 20	第69図	16.日垣遺跡 平面図・調査区土層断面図	P. 45
第31図	7.牟礼遺跡 出土遺物	P. 20	第70図	16.日垣遺跡 遺構検出状況	P. 46
第32図	8.東奈良遺跡 調査位置図	P. 21	第71図	17.満咲遺跡 調査位置図	P. 47
第33図	8.東奈良遺跡 調査区配置図	P. 21	第72図	17.満咲遺跡 調査区配置図	P. 47
第34図	8.東奈良遺跡 調査区平面・断面図	P. 22	第73図	17.満咲遺跡 調査区平面図・土層断面図	P. 48
第35図	8.東奈良遺跡 発掘調査風景	P. 22	第74図	17.満咲遺跡 完掘状況	P. 48
第36図	9.中条小学校遺跡 調査位置図	P. 23	第75図	18.太田城跡 調査位置図	P. 49
第37図	9.中条小学校遺跡 調査区配置図	P. 23	第76図	18.太田城跡 調査区配置図	P. 49
第38図	9.中条小学校遺跡 遺構平面・断面図	P. 25	第77図	18.太田城跡 調査区平・断面図	P. 50
第39図	9.中条小学校遺跡 遺構検出状況・出土遺物	P. 26	第78図	18.太田城跡 遺構検出状況・出土遺物	P. 51

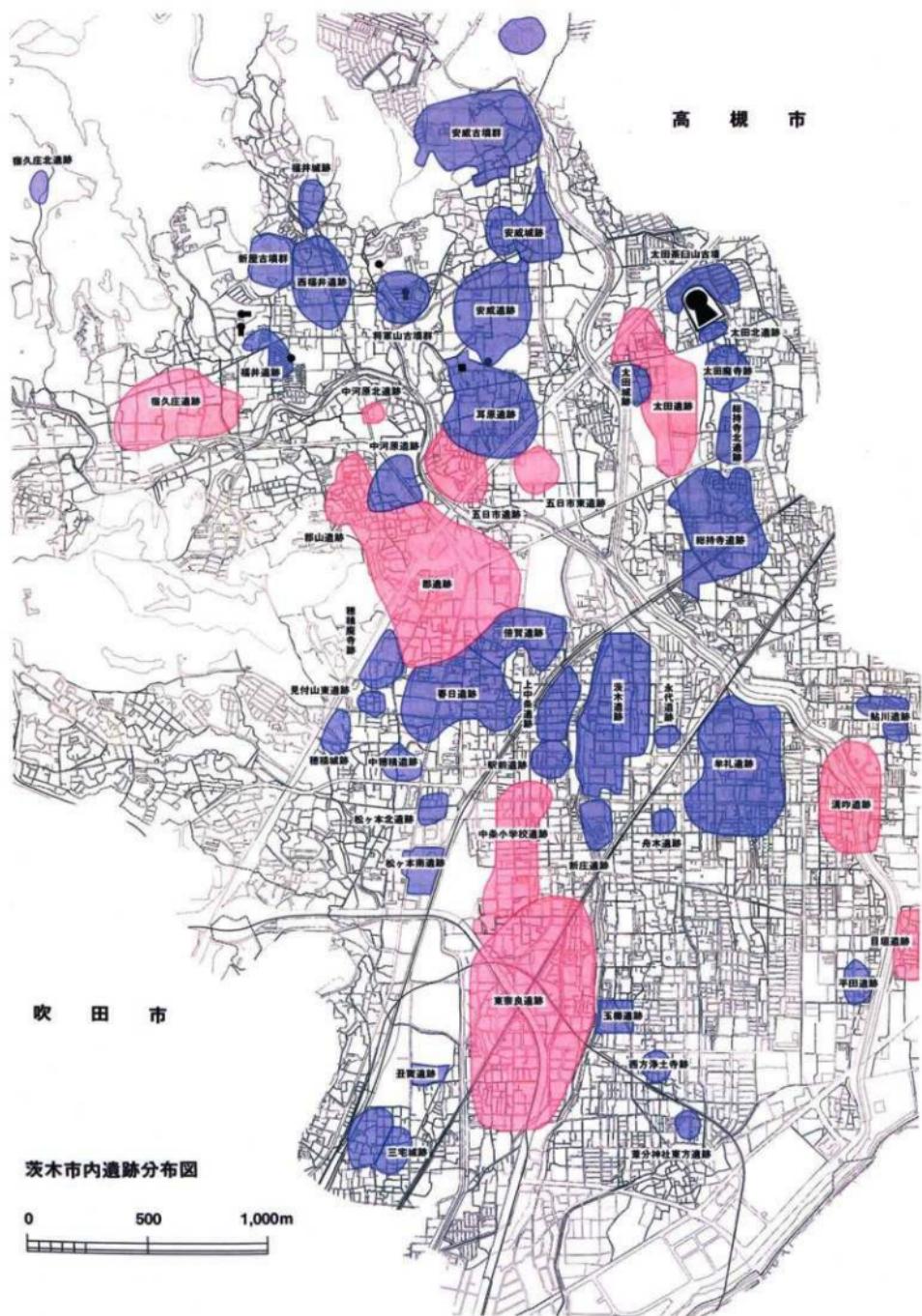
第 79 図	19. 上中条遺跡 調査位置図	P. 52	第 92 図	22. 安威城跡 調査位置図	P. 62
第 80 図	19. 上中条遺跡 調査区配置図	P. 52	第 93 図	22. 安威城跡 調査区配置図	P. 62
第 81 図	19. 上中条遺跡 調査区平面・土層断面図	P. 53	第 94 図	22. 安威城跡 調査区平面・土層断面図	P. 62
第 82 図	19. 上中条遺跡 SD-1 内 出土遺物	P. 54	第 95 図	22. 安威城跡 遺構完掘状況	P. 63
第 83 図	19. 上中条遺跡 調査状況	P. 55	第 96 図	23. 目垣遺跡 調査位置図	P. 64
第 84 図	20. 倍賀遺跡 調査位置図	P. 56	第 97 図	23. 目垣遺跡 調査区配置図	P. 64
第 85 図	20. 倍賀遺跡 調査区配置図	P. 56	第 98 図	23. 目垣遺跡 目垣城跡想定図	P. 65
第 86 図	20. 倍賀遺跡 平面・断面図	P. 57	第 99 図	23. 目垣遺跡 第1・第2遺構平面図、遺構検出状況	P. 66
第 87 図	20. 倍賀遺跡 発掘調査風景	P. 58	第 100 図	23. 目垣遺跡 遺構平面図、調査区北・東壁土層断面図	P. 67
第 88 図	21. 苓木遺跡 調査位置図	P. 59			
第 89 図	21. 苓木遺跡 調査区配置図	P. 59	第 101 図	23. 目垣遺跡 遺構検出状況・出土遺物写真	P. 68
第 90 図	21. 苓木遺跡 調査区平面・南壁土層断面図	P. 60			
第 91 図	21. 苓木遺跡 調査状況	P. 61			

高機市

吹田市

茨木市内遺跡分布図

0 500 1,000m



平成22年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表

No	遺跡名	調査担当	調査位置	調査期間	調査面積	調査内容
1	牛札遺跡	中東	中津町855-1	H22.2.16	7.0m ²	平安時代～中世時代 平安中期の洪水覆土
2	茨木遺跡	閑	本町1393	H22.3.8	15.0m ²	近世時代 土壠
3	茨木遺跡	中東	大手町1594	H22.3.24	12.5m ²	近世時代 溝・近代畾込み・近世ピット
4	安威城跡	宮本	安威二丁目2012	H22.4.26	24.0m ²	中世時代～近世時代 ピット・土壠
5	茨木遺跡	宮本	片桐町1071-4	H22.5.11	14.0m ²	近世時代 水路・杭列・溝
6	常楽寺跡	閑	歳垣内三丁目408	H22.6.1	12.0m ²	中世時代～近世時代 溝
7	牛札遺跡	宮本	中津町848・849	H22.6.30	7.6m ²	中世時代 ピット・土壠
8	東奈良遺跡	中東	天王二丁目589-29	H22.7.2	9.0m ²	近世時代 洪水層
9	中条小学校遺跡	宮本	奈良町584-4・584-8	H22.7.14～ H22.7.15	8.0m ²	古墳時代～中世時代 第一遺構面：鶴溝・ピット 第二遺構面：ピット・有輪類足跡
10	牛札遺跡	閑	田町14-33	H22.7.20	9.0m ²	遺構面は検出されず、出土遺物 は客土の可能性が高い
11	春日遺跡 倍賀遺跡	閑	春日五丁目46-7	H22.7.26	9.0m ²	飛鳥時代 溝
12	太田茶臼山古墳	中東	太田三丁目158-1	H22.7.26	10.0m ²	弥生時代
13	中条小学校遺跡	閑	下中条町122-4・122-6	H22.8.16～ H22.8.17	56.0m ²	弥生時代～古墳時代 ピット
14	牛札遺跡	富田	中津町855-3	H22.8.18	12.0m ²	中世時代 洪水流路 遺物は二次堆積の可能性が高い
15	耳原遺跡	宮本	耳原二丁目487-14・494-8	H22.8.19	12.0m ²	弥生時代 溝
16	目垣遺跡	宮本	目垣二丁目746-6・743-7	H22.8.23	8.3m ²	飛鳥時代～奈良時代 ピット・溝・土壠

No	遺跡名	調査担当	調査位置	調査期間	調査面積	調査内容
17	潤沢遺跡	富田	五十鈴町245-9	H22.8.31	11.0m ²	近世時代～現代 水田跡
18	太田城跡	宮本	太田一丁目617-5	H22.9.13	8.8m ²	飛鳥時代～中世時代 遺構検出せず
19	上中条遺跡	富田	上中条一丁目61-3	H22.10.1	19.0m ²	弥生時代～古墳時代 溝（古墳時代後期頃の方墳の 周溝と思われる）
20	倍賀遺跡	閑	春日五丁目49-15	H22.10.15	12.0m ²	平安時代～近世時代 柱穴
21	茨木遺跡	富田	元町1530-9・1530-10	H22.10.29	12.0m ²	近世時代 溝・ピット・竹管水道を伴う井 戸・洪水跡
22	安威城跡	富田	安威二丁目2013・2324	H22.11.24～ H22.11.25	18.5m ²	不明 遺構検出せず
23	日垣遺跡	宮本	日垣一丁目8-6	H22.11.30～ H22.12.1	24.0m ²	

平成 22 年度の発掘調査のうち、平成 23 年 1 月以降の調査についての報告は「平成 23 年度発掘調査
概報・個人住宅建築に伴う発掘調査報告」にて掲載します。

1. 牟礼遺跡

所在地 茨木市中津町855-1

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年2月16日

調査面積 約7m²

調査担当 中東 正之

調査結果

経過 牟礼遺跡は、阪急茨木市駅の東側、安威川右岸の沖積低地に立地する、中津町と園田町を中心とした、東西約600m、南北約800mにわたって広がる遺跡である。昭和60年に中津町のジャスコ新茨木店の調査で発見され、自然流路、井堰、水田などが検出されている。自然流路からは縄文時代晩期の土器が出土しているため、最古級となる水田城の存在が想定され、全国的に注目された。

その後の周辺の調査では、これを裏付けるべく、同時期の集落域の発見が期待されたが、いまだ住居跡等の明確な生活痕跡の確認には至っていない。本調査地は、遺跡発見地点の100m程北側に位置している。当地の東隣の平成13年度調査地では、弥生時代前期をはじめ古墳時代前期初頭および同後期の遺構や中・近世水田面などが検出されており、縄文時代晩期の土器も落ち込み状の遺構に伴うものが出土している。古墳時代の生活面は地表面から約1.8m、弥生時代前期の生活面はさらに0.5m下層と深いが、当地においては、これらの生活面に該当する層位の確認を目的に発掘調査を実施した。

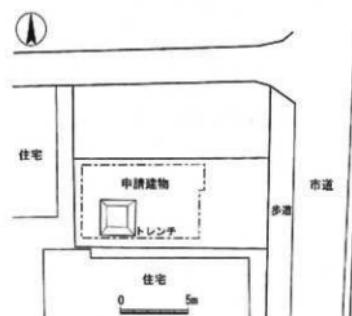
遺構と遺物 現地表面は標高約7.9mを測る。層序は、上層より第1層 現代盛土、第2層 整地土、第3層 褐灰色砂質土、第4層 にぶい褐色砂質土、第5層 にぶい褐色粘質土、第6層 黄灰色砂混粘質土(洪水層)、第7層 黄灰色砂(土師器含む、洪水層)、第8層 灰色粘土(水田土壤?)、第9層 灰色シルト混粘土 第10層 緑灰色粘土 第11層 暗灰色粘土(水田土壤?)、第12

層 青灰色粘土となる。第8層と第11層について、ある程度の土壤化がみられるところから、水田面や生活面であったことがうかがえる。これを平成13年度調査地のデータとあわせると、標的的にも、第8層が古墳時代、第11層が弥生時代前期の生活面に対応すると考えられるが、該当する遺物・遺構はみなかった。第8層を覆う洪水土である第7層で出土した土師器は、ての字状口縁の皿の破片とみられ、平安時代中期(11世紀代)に比定される。

まとめ 当地東隣の平成13年度調査地から統く、古墳時代と弥生時代前期の生活面に該当す



第1図 調査位置図



第2図 調査区配置図

る層位の確認を実施した。その結果、断面観察によると、ほぼ同標高で土壤化した第8層と第11層を認めたが、同時期の遺物・遺構は確認できなかった。とくに第8層については、被覆する第7層（洪水層）の出土遺物から、平安時代中期の水田面ではないかと考えられる。尚、同時期の洪水層は、当地の南東約170mの平成21年度調査地において、当地よりもさらに微細な堆積層として、ほぼ同標高で確認されている。

1	現代盛土層
2	整地土層
3	褐色灰色砂質土
4	にぶい褐色砂質土
5	にぶい褐色粘質土
6	黄灰色砂混粘質土（酸化物沈積）
7	黄灰色砂（土器含む淡水層）
8	灰色粘土（炭化物含む）
9	灰色シルト混粘土
10	緑灰色粘土
11	暗灰色粘土（水田土壤？）
12	青灰色粘土

0 1m

第3図 南壁断面柱状模式図



トレンチ全景（東から）



南壁断面



調査地全景（東から）



調査風景（西から）

第4図 発掘調査風景

2. 茨木遺跡

所在地 茨木市本町1393

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年3月8日

調査面積 約15m²

調査担当 関 桦

調査結果

経過 茨木遺跡は、茨木市の中心部に位置し、元茨木川の左岸にそって南北約1km、東西約0.45kmの地域を範囲とする。

遺跡の中心は、戦国期の国人・茨木氏の拠点であつた茨木城跡であり、中世においてはその城下町として栄え、近世になり徳川幕府の政策である一国一城令により茨木城が破却されたのちは摂津の在郷町として発展した集落遺跡である。

茨木遺跡では、古地図や地籍などから茨木城とその城下町の復元がなされており、今回の調査地は茨木遺跡の南東部、復元では茨木城下町における町屋に推定される地域に位置している。

また、調査地の南西に位置する平成18年度の発掘調査地では、南北方向の流路を検出し、遺構埋土からは戰豊期から江時時代初頭に相当する瓦や陶磁器とともに多量の建具が出土している。この調査地付近が茨木城の復元案では外堀の推定地域にあたることから、この流路が茨木城の遺構である可能性が高いと考えられている。

今回の調査は、個人住宅新築工事に伴い柱状改良工事が現地表面(GL)から-3.75mまで行なわれるため、実施するにいたった。

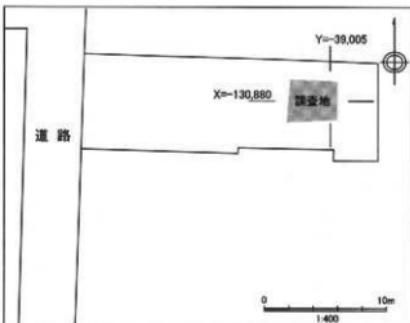
調査区は、住宅が密集した地域であり敷地面積や掘削土量を考慮して南北3m、東西4mと設定した。

基本層序 現地表面は、標高約10.6mをはかる。現地表面から約-1.5mで遺構面を確認した。層序は、上層より第1層(現代盛土層)が層厚1.1m、第2層(10YR5/6黄褐色砂質土)が層厚0.25m、第3層(10YR5/2灰黃褐色粘性砂質土)の上層で遺構を検出した。地山層検出面のレベルは約T.P.+9.1mであった。

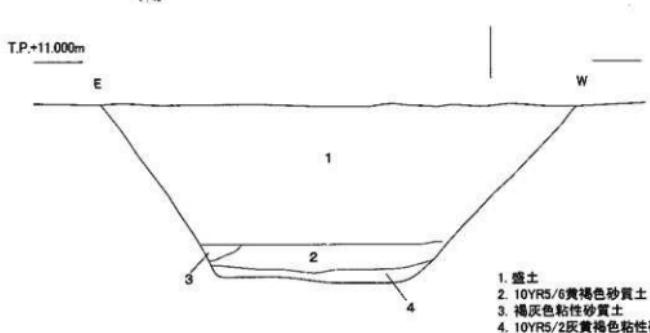
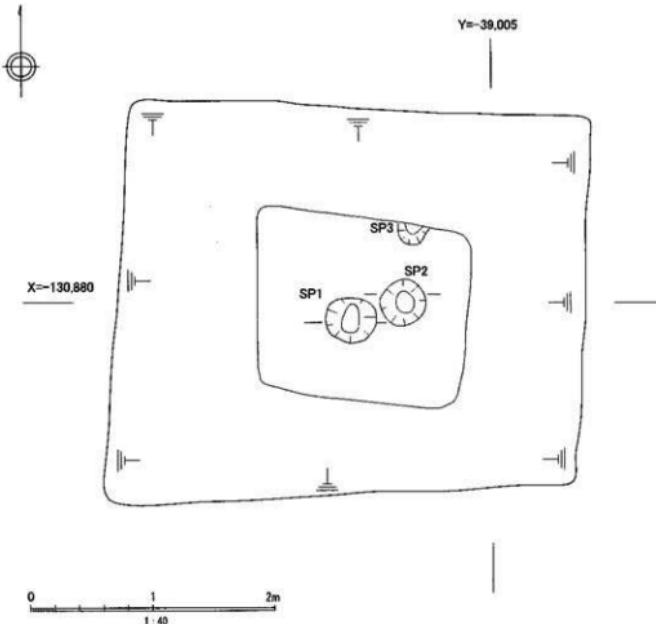
検出遺構 今回の調査では、ピットを3基検出した。これらの遺構からは近世の瓦片などとともに粘土塊が多く出土している。粘土塊は土壁の部材と考えられ、近世の町家に関係する可能性があると考えられる。



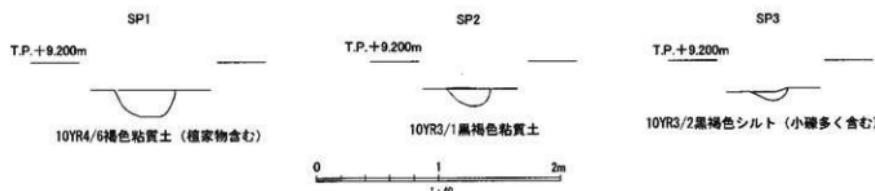
第5図 調査位置図



第6図 調査区配置図



平面・断面図



第7図 遺跡平面・断面図、遺構断面図

出土遺物 いずれのピットからも平瓦・丸瓦の破片とともに粘土塊が出土している。瓦は近世のものであり、粘土塊は屋敷の土壁の構造材の一部である可能性が高いと考える。

まとめ 今回の調査地の近隣では、平成18年度発掘調査において南北方向の流路から瓦や陶磁器とともに欄間などの木製建具が一括して出土している。この流路は、茨木城の外堀であった可能性が高いと考えられている。また、出土建具のなかでも特に幅約2mを測るおさ欄間は、寺院の客殿や武家屋敷や城郭の対面所など格式の高い建物に用いられるところから、茨木城内で用いられ、破城時に堀に廃棄されたものであるとの指摘もなされている。このように、今まで詳細が不明であった茨木城のすがたを考えるうえでの貴重な遺構や遺物が確認されている。

今回の調査では、調査面積が狭小なため調査範囲が近世の遺構面までとなり、直接茨木城や城下町に関わる遺構や遺物を確認することはできなかった。しかし、茨木城破城以後の在郷町としての姿を考えるうえの一助となればと考える。

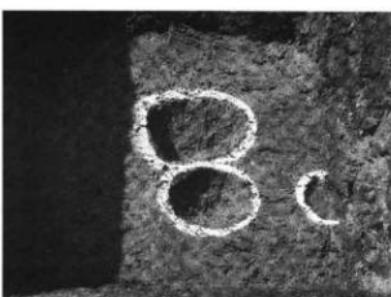
参考文献

「茨木遺跡」『平成18年発掘調査概報』2007年 茨木市教育委員会

『よみがえる茨木城』2007年 中村博司編 清文堂



調査地全景（西から）



遺構実写真（東から）

第8図 発掘調査風景

3. 茨木遺跡

所在地 茨木市大手町1594

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年3月24日

調査面積 約12.5m²

調査担当 中東 正之

調査結果

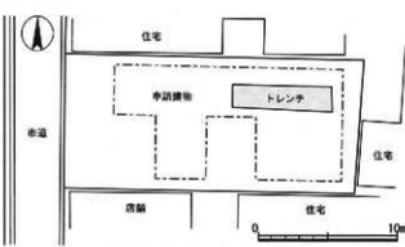
経過 茨木遺跡は、茨木川左岸の沖積低地に広がる本市中心市街地に立地し、中世から近世の集落跡を主体にする遺跡である。同遺跡は、中世城下町を起源とし、廃城後も地域の商業の中心地として発達した近世在郷町エリ亞内包される。遺跡範囲は、北から上泉町・東宮町・片桐町・本町・宮元町・元町・大手町にかけ、

茨木川に沿って延びる、東西約450m、南北約1000mに広がっている。もとより市街地として発達したために、近年の再開発に伴う発掘調査によって、ようやくその全容が明らかとなりつつある。とくに平成8年度の大手町の調査では、茨木城懸構えの一部と推定される掘が検出され、はじめて茨木城の考古学的な知見を得た。また平成18年度の本町の調査では、茨木城東堀と推定されていた位置に流れる流路から、破城の一例ではないかとされる建具が一括出土し、にわかに興味が高まっている。本調査地は、享保18年(1733年)の地図によると鍬屋町に該当し、東本願寺茨木別院参道に面して商店などの建ち並ぶ地区であったことが推測される。当地の西方約50mに位置する平成12年度調査地では、中世と近世の遺構面を検出しており、これに該当する遺構面の確認を目的に発掘調査を実施した。

遺構と遺物 茨木遺跡の層序は、平坦な沖積低地特有の細粒質の灰色土が基本となる。排水が比較的良好な場合、旧表層である包含層や耕作土の下層(次表層)は、明るい黄色や黄褐色を呈することが多く、容易に遺構が検出される。しかし、多くの場合、城下町形成以降の絶え間ない生活活動と、氾濫をくりかえす茨木川の影響で、洪水や整地による度重なる表層の更新に、流路や廃棄坑などが複雑に重なり、特定の時期の遺構面の普遍的な広がりを捉えることが難しい状況がみられる。

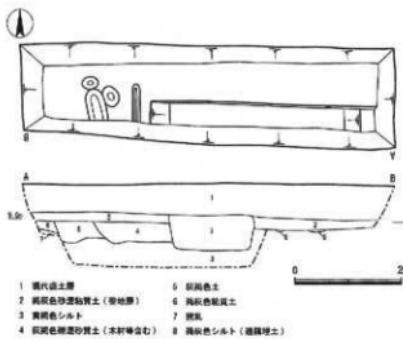


第9図 調査位置図



第10図 トレンチ配置図

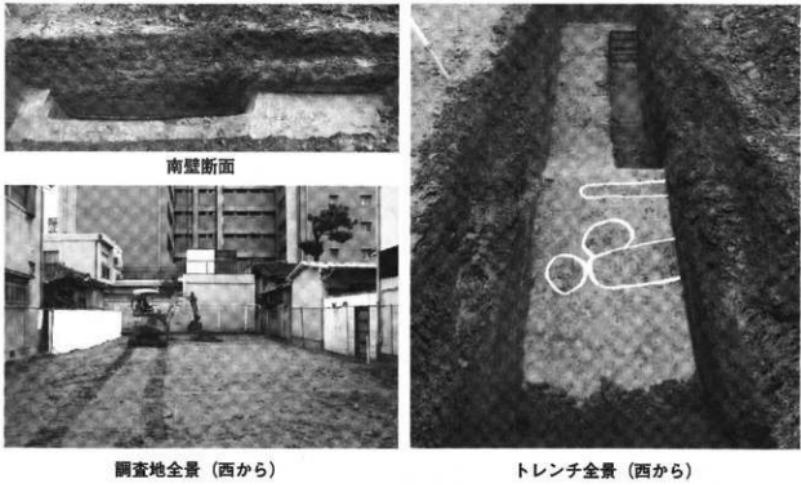
本調査地は、比較的良好な排水状況をあらわす層序であったが、途中から雨に見舞われ、調査は困難なものとなった。当地の現地表面は標高約9.7mを測る。標高約8.9mで、遺構面の可能性のある第3層 黄褐色シルトを確認したため、遺構検出を実施し、近世のピットや溝状遺構を検出した。ところが溝状遺構の一部を掘り下げその断面を観察すると、実は搅乱や掘り込みが集中しているために溝と錯



第11図 遺構平面図・南壁断面図

誤していたことが判明した。掘り込みの上面形は判然とせず、木材等を含むものの時期は不明なため、検出・完堀は実施しなかった。ピット埋土からは、小皿と思われる土師質土器の細片が出土している。

まとめ 平成12年度調査地の近世遺構面とほぼ同標高で近世遺構面を検出した。しかし、調査範囲が狭小なため、その土地利用状況については不明である。中世遺構面については、該当する標高8.0m付近まで断面観察を実施したが、その存在は確認できなかった。



第12図 発掘調査風景

4. 安威城跡

所在地 茨木市安威二丁目2012の一部

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年4月26日

調査面積 約24m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

経過 安威城跡は、北摂山地を源流とする安威川が三島平野へ流れ込んで形成した河岸段丘上に立地する、土豪安威氏によって築かれたとされる中世の城砦（居館）である。その土豪安威氏については、1363（貞治二）年に著わされた『六波羅蜜寺文書』中の「御所近習連署奉加状」にその名が初見される。この事から、鎌倉時代後期頃には安威氏は在地領主として、この地を治めていたと考えられる。古くは、この地周辺においては縄文時代頃のものと考えられる石器や、同時期の後期から晩期の土器の散布がみられる事から、中世より以前にはこの地に人々が生活していた事が伺われる。安威城跡の包蔵地範囲は、東西約0.36km×南北約0.7kmの不整形ながらやや南北に長く広がっている。なお、遺跡の包蔵面積は、約15万6千m²を占める。

既往の調査では、本調査地の西へ約50mのところで安威公民館の建設に伴い、平成14年に発掘調査が行なわれている。調査の結果、近世の集落（安威村）に関連する柱穴や井戸、土壌遺構等が検出されている。なお、今回の調査地は安威城跡の外郭に接する地域に相当する。

今回の調査は、個人住宅新築に伴い、発掘調査を実施するに至った。

基本層序 基本層序については、第1層～第2層に大別する事ができる。上層より順に、第1層、現代の盛土層である。層厚は、概ね0.5mを測る。第2層は近世頃の生活面がメインとなる層になる。土性は明黄褐色土を主体とし、それに砂礫が混じる。なお、中世頃の層は、近世以降の整地によりそのほとんどは削平されたものと考えられる。

検出遺構 今回の調査では、近世を中心とした生活面を検出した。検出された遺構としては、ピット状遺構15基、土壌状遺構5基である。

出土遺物 今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド（縦14cm×横36cm×奥行き56cm）に換算して1箱分である。その種類と内訳は、近世頃の丸・平瓦や陶磁器、鉢などが出土している。

まとめ 今回の調査から、近世頃の集落跡の一端が少ないながらも判明した。なお、この地は古来、中臣藍連の居住地に比定されており、その後は浜間領→興福寺関係の所領となっていた事から、藤原氏との縁の深い地域である。古代から中世頃の生活面は近世以降の整地によりそのほとんどは削平されたものと考え



第13図 調査位置図



第14図 調査区配置図

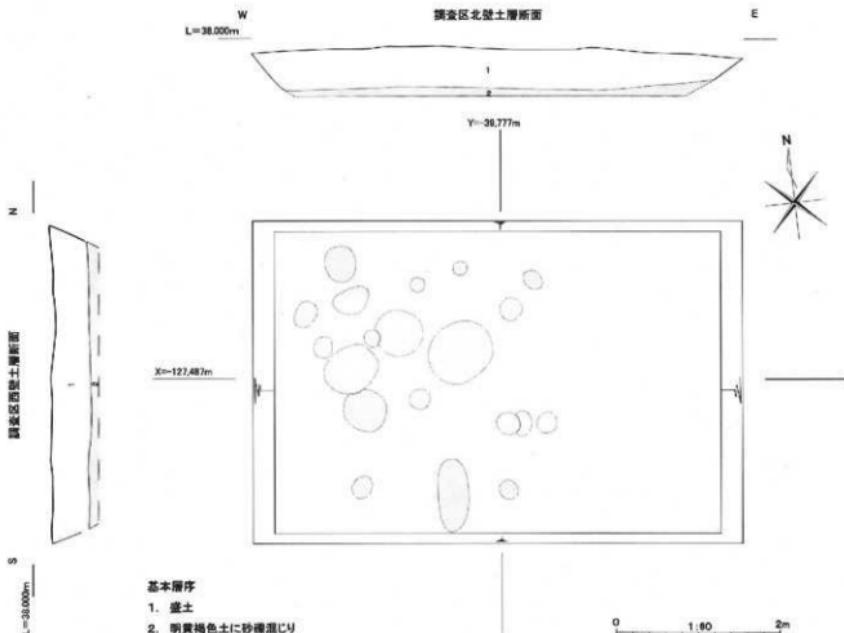
られる。今回の調査地は第17図を参考にすると、外郭の南に位置する「大手口」に対して北側の「大手口」に隣接している。平素は安威山麓の内郭に構えた居館に起居し、戦乱期となりざ形勢が不利となれば、その北側の「大手口」を通り背後の安威の山にある防御拠点であった「安威砦」へ移り、戦闘指揮を執ったのであろう。

参考文献

『茨木市史』 昭和44年6月 茨木市役所

『わがまち茨木 - 城郭編 -』 昭和62年3月 茨木市・茨木市教育委員会

『平成14年度発掘調査概報』 平成14年3月 茨木市教育委員会



第15図 造構平面図・土層断面図



申請地 全景（北東より）



調査地 全景（北東より）



遺構面 検出状況（東より）



西壁土層断面 機械掘削深度



調査風景（南西より）

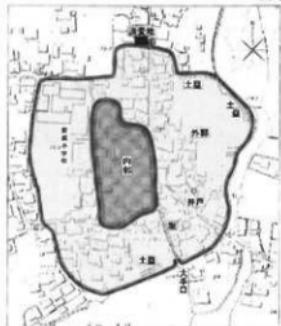


遺構面、直上精査中出土遺物

第16図 調査風景・出土遺物



茨木市内における城郭位置図



安威城跡図

番号	名前	位在地	築造年	形状	主な跡地	附註	面積	備考
1	大内城	伏見区大内町大内1-100番地	15世紀後半	平城	主郭・東側郭・西側郭	130ha	現状の城跡のうち13ha	
2	大内城	「大内」	15世紀後半	平城	主郭・東側郭	130ha	現状の城跡のうち13ha	
3	高坂城	二条区高坂町高坂1-100番地	15世紀後半	平	主郭	15ha		
4	佐久城	伏見区佐久町佐久1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	20ha	現状の城跡のうち10ha	
5	稻荷城	伏見区稻荷町稻荷1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
6	関山城	伏見区関山町関山1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
7	藤原城	伏見区藤原町藤原1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
8	朝日城	伏見区朝日町朝日1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
9	安房城	伏見区安房町安房1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
10	在原城	伏見区在原町在原1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
11	北山城	伏見区北山町北山1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
12	金城	伏見区金城町金城1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
13	岩瀬城	伏見区岩瀬町岩瀬1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
14	澤井城	伏見区澤井町澤井1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
15	流山城	伏見区流山町流山1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
16	西河原城	伏見区西河原町西河原1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
17	駒形寺城	伏見区駒形町駒形1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	
18	土上城	伏見区土上町土上1-100番地	15世紀後半	平城	主郭	15ha	現状の城跡のうち10ha	

城郭一覧表

第17図 市内城郭位置図

5. 茨木遺跡

所在地 茨木市片桐町1071-4

開発事業 個人住宅建設事業

調査期間 平成22年5月11日

調査面積 14m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

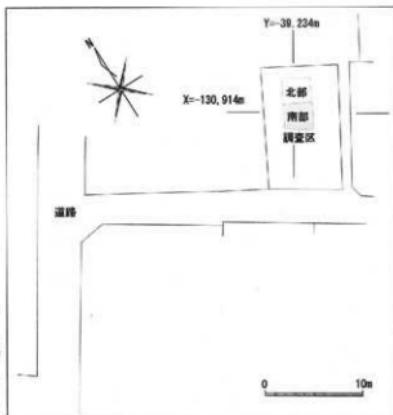
経過 茨木遺跡は、上泉町・元町・本町・片桐町・宮元町・大手町にかけて広がる、弥生時代から中・近世にかけて営まれた集落跡である。遺跡の範囲は、東西約0.4km×南北約1kmの南北に長く広がっている。遺跡の包蔵面積は、約47万4千m²を占める。その中でも、片桐町・本町・元町を中心とし広がる茨木城跡の範囲が推定されており、平成18年度の調査において城の濠と考えられる流路内より、おさ欄間(2点)や造り戸(3枚)、明かり障子(1点)、化粧板、柱材(角、丸、板材)といった建具が保存の良い状態で出土している。これらの建具が出土したのは、織豊期から江戸時代初期の頃の生活面である。なお、この時の調査で17世紀末頃から18世紀代の生活面を中心とした面を第1遺構面、17世紀中頃から後葉頃の生活面を中心とした第2遺構面、16世紀後葉(織豊期)から17世紀前葉頃(江戸時代初期)頃の生活面を第3遺構面、古墳時代・鎌倉時代から室町時代の生活面を中心とした面を第4遺構面と時代毎に、その様相が明らかとなった。なお、先に述べた建具一式が出土したのは、第3遺構面からである。当地において、個人住宅建設に伴い事前に試掘調査を行なった結果、近世頃の遺物・遺構を検出した事から、発掘調査を実施するに至った。

今回の調査では、調査地の立地的条件を考慮し16~17世紀頃の生活面を中心とした第1遺構面を調査の対象とした。

基本層序 基本層序については、第1層~第6層に大別する事ができる。上層より順に、第1層、現代の盛土層(層厚、約0.5m)である。第2層はオリーブ黒色粘質土SC5Y3/2を主体とし褐色細砂S10YR4/4の土色を持つ、自然堆積層(層厚、約0.15m)である。第3層は、暗オリーブ色粘質土SC5Y4/4を主体とし褐色砂質土LS10YR4/6の土色を持つ、自然堆積層(層厚、約0.1m)である。第4層は、オリーブ褐色粘性シルトSiCL5Y4/6を主体とし黄褐色微砂S2.5Y5/6の土色を持つ、自然堆積層(層厚、約



第18図 調査位置図



第19図 調査区配置図

0.15m)である。第5層は、近世遺物包含層である。土性は、オリーブ褐色粘質土HC2.5Y4/6を持つものである。第6層は、近世遺構面である。土性は、黄褐色粘質土HC2.5Y5/6を持つものである。

検出遺構 今回の調査では、17世紀末頃から18世紀代頃を中心とした生活面を検出してい る。検出された遺構としては、ピット状(杭列)遺構6基、流路(もしくは道路状)遺構1条、溝状遺構1条である。なお、流路もしくは道路状遺構としたのは、先に述べた平成18年度の調査で杭列に伴う道路状遺構が東西方向に検出長約7m、幅約8mの規模で検出されており、土性や杭列に伴う事などに類似性が見られる。但し、調査で検出されたこの遺構は、西肩は調査区内において検出されているものの、対となる東側の肩が調査区外に伸び検出されていない事から、その詳細の規模は不明である。

出土遺物 今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド(縦14cm×横36cm×奥行き56cm)に換算して1箱分である。その種類と内訳は、古墳時代の須恵器や平安時代の頃の須恵器や土師皿などの遺物が出土している。

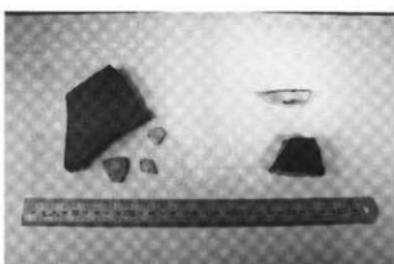
まとめ 今回の調査から、近世頃にかけての集落跡の一端が少ないながらも判明した。茨木遺跡の本調査の事例は、ここ最近増加している。平成18年度の調査では、非常に大きな成果を得ている。今後の周辺での調査および成果に期待するものである。

参考文献

『平成18年度発掘調査概報』 平成18年3月 茨市教育委員会

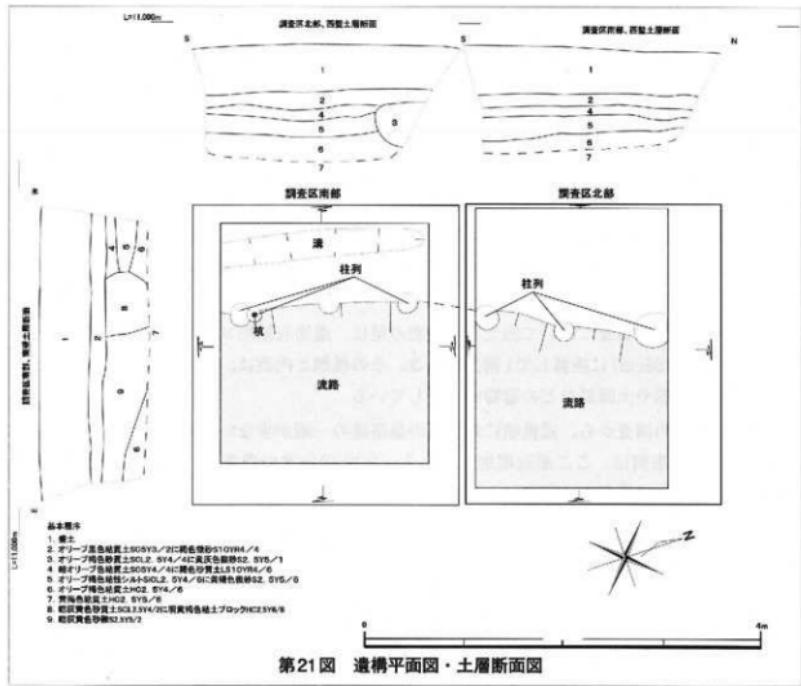


調査区南部 遺構面直上出土遺物

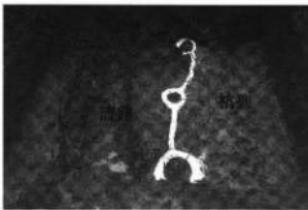


調査区北部 SD-01内、出土遺物

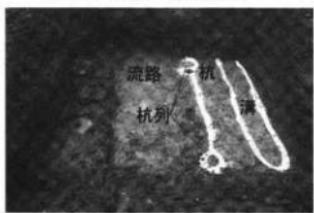
第20図 出土遺物



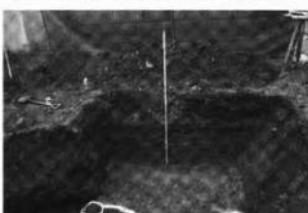
調査区 全景 (北東より)



調査区北部 遺構検出状況（北より）



調査区南部 遺構検出状況（北より）



調査区北部 西壁土層断面

第22図 遺構検出状況

6. 常楽寺跡

所在地 茨木市藏垣内三丁目408

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年6月1日

調査面積 約12m²

調査担当 関 桦

調査結果

経過 常楽寺跡は、茨木市の南端部、摂津市との市境に近接した藏垣内に位置する。常楽寺とは、古墳時代にこの地域を支配していた三宅氏の氏寺（三宅庵寺）として建立されたものであり、江戸時代には天皇家・公家方の祈願所として栄えたが明治6年（1873年）に廃寺となった。現在は、藏垣内三丁目所在の万福寺に三宅庵寺のものと考えられている塔婆心礎が残されている。

平成12年には公園内の消防用貯水槽建設工事に伴う調査で古墳時代の柱穴が数十基確認され、この地域に古墳時代の集落の存在することがあきらかとなり、この集落が古代豪族である三宅氏の拠点である可能性が指摘されている。

今回の調査地は、平成12年度の発掘調査地の北側に位置し、個人住宅建設にともない柱状改良工事がおこなわれることから発掘調査を実施することとなった。

調査区は敷地内に既存建物などがあったため、当初の想定していた調査面積よりも狭い南北約3m、東西約4mと設定した。

基本層序 現地表面は、標高約6.3mをはかる。現地表面から約-1.3mで遺構面を確認した。層序は、上層より第1層（現代盛土層）が層厚0.5m、第2層（旧耕作土層）が層厚0.15m、第3層（10YR7/4にぶい黄橙色粘質土に7.5YR5/4にぶい橙色粗砂を含む）が層厚0.2、第4層（10YR6/1灰白色粘性砂質土、細砂多く含む）が層厚0.3m、第5層（10YR5/1褐灰色粘質土に黄褐色粘土ブロック状に含む）が層厚0.2mであった。

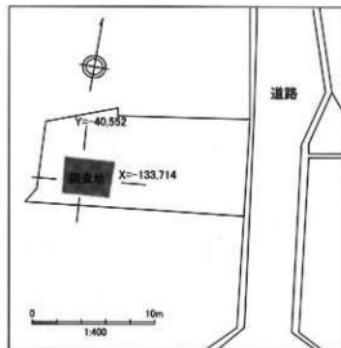
第5層が遺構面となる。第5層の下層確認をしたところ、第6層として黒褐色粘質土をブロック状に含む青灰色粘土層が続いていた。

検出遺構 第5層において、東西にはしる溝（SD01）を検出した。溝の幅は0.6m、深さは0.2~0.3mである。

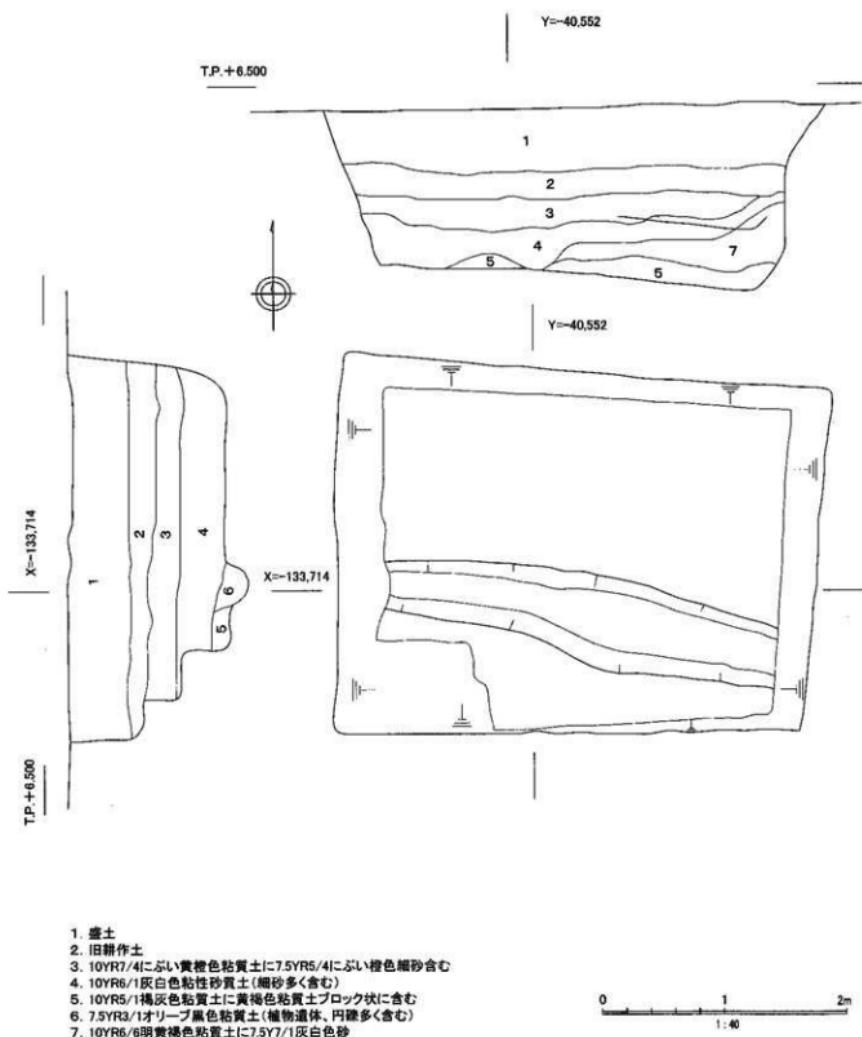
出土遺物 出土遺物は、第3層から須恵器片が1点。溝（SD01）から壺や鉢といつた陶器片が数点出土した。時期については、いずれも小片であるため時期を特定できなかったが、おおむね中世に相当



第23図 調査位置図



第24図 調査区配置図



第25図 平面・断面図

すると考える。

まとめ 常楽寺跡においては、発掘調査事例が少なく、遺跡の様相もまだ明らかになっていないのが現状である。

今回の調査においても、確認できた遺構や遺物は中世のものである可能性が高く、常楽寺（三宅廃寺）に直接関係する遺物や遺構を確認することはできなかった。ただ、古代において、この地域には朝廷の直轄地である屯倉がおかれていたと考えられ、その管理に中臣氏の氏族である三宅連がかかわっていたと考えられている。

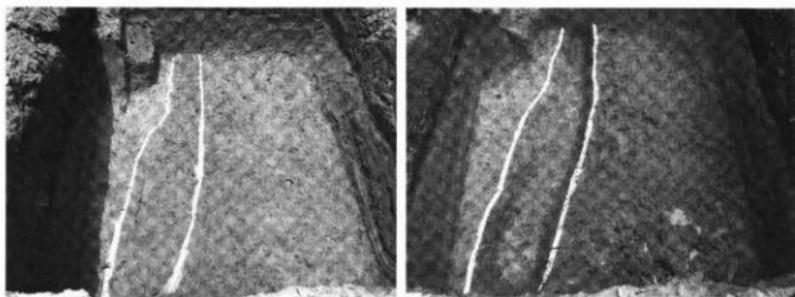
このようなことからも、この地域に大規模な集落があったで可能性は高く、今後のこの地域における調査成果の増加に期待したい。

参考文献

『わがまち茨木 -神社・仏閣編-』 1989年 茨市教育委員会

『茨木の史跡』 1998年 茨市教育委員会

『常楽寺跡』 2001年 『平成12年度発掘調査概報』 茨市教育委員会



第26図 遺構検出状況

7. 牟礼遺跡

所在地 茨木市中津町848・849の一部

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年6月30日

調査面積 7.6m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

経過 牟礼遺跡は、北から末広町・中村町・双葉町・中津町・舟木町・園田町にかけて広がる、縄文時代晩期から中世まで継続的に営まれた複合的な集落遺跡である。遺跡の包蔵地範囲は、南北約0.9km×東西約0.6kmとやや南北に長い形状を呈しており、その面積は47万5千m²を占める。昭和16年に今回の調査地より南に約140mのところで、大型スーパーの建替えに伴い事前に発掘調査が行なわれ、その際に縄文時代晩期（滋賀里Ⅲ～Ⅳ式・船橋式）の土器や井堰、水田跡等が検出されている。また、同調査地より東方に約100mのところではマンション建設に伴い発掘調査が行なわれ、生駒西麓産胎土

の縄文時代晩期（船橋式～長原式）の土器群や弥生時代前期の遺構が検出されている。なお、落ち込み埋土内より縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器が併せて出土しており、木葉文の施された彩文土器の破片も見つかっている。また、古墳時代前期初頭頃（庄内式併行期）の土器やそれに併せて平鉗、なすび形又鋤といった木製農耕具が出土している。

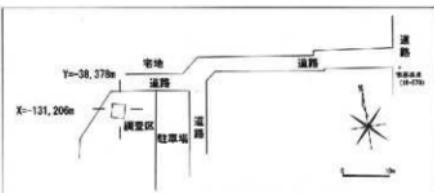
今回の調査においては、主に中世頃の生活面を調査の対象とした。なお、今回の平成22年度の牟礼遺跡における発掘調査として、第1次目となる。

基本層序 基本層序については、第1層～第3層に大別する事ができる。層序は上層より順に、第1層は現代の造成盛土を含む層である。層厚は、全体を通して概ね0.6mを計る。2層は旧耕作土で、層厚は概ね0.2mを測る。3層目は、淡黄色砂質土をその土性に持つ中世遺物包含層である。層厚は概ね、0.15mを測る。

検出遺構 今回の調査において検出された遺構は、土壤状遺構1基、ピット状遺構1基である。存続時期については出土遺物から中世頃が比定できるが、そのほとんどが磨滅している事から詳しい時期については不詳である。それぞれ検出



第27図 調査位置図



第28図 調査位置図

された遺構の規模であるが、調査区中央部から北側にかけて検出された落ち込み状遺構であるが、南北検出幅約1.7m、東西も幅約1.7mであるが、南北幅については調査区外になる為にその形状は不明である。深度は0.2mと比較的浅く、遺物も出土していない事からどのような意図で造られたのかは不明である。

出土遺物 今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド（縦14cm×横36cm×奥行き56cm）に換算して1箱分である。その種類と内訳は、古墳時代の須恵器や平安時代の頃の須恵器や土師皿などの遺物が出土している。

まとめ 今回の調査から、第1遺構面では中世頃の生活遺構面を検出し、また、第2遺構面では弥生時代後期頃から古墳時代初頭にかけての生活遺構面を検出した。それぞれの時代において、集落を構成するうえで必要な各遺構が検出された。これらの成果を基に、今後は既往の調査と照らし合わせて、中条小学校遺跡の集落の歴史的背景を検討してあきらかにしていきたい。



調査地 全景（北より）



遺構検出状況（西より）

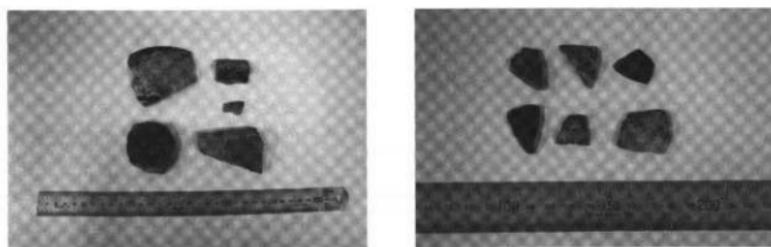
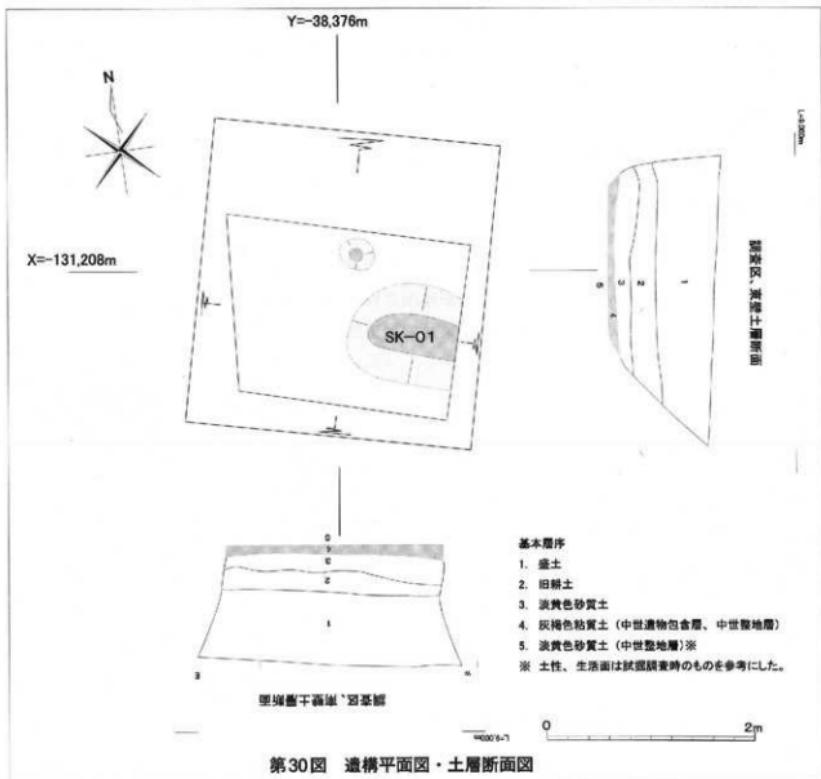


調査風景（東より）



遺構面上精査中、出土遺物

第29図 調査風景・出土遺物



第31図 出土遺物

8. 東奈良遺跡

所在地 茨木市天王二丁目589-29

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年7月2日

調査面積 約9m²

調査担当 中東 正之

調査結果

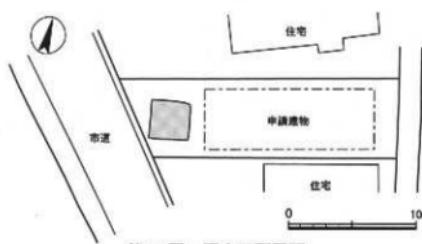
経過 東奈良遺跡は、千里丘陵から東方向に流れる河道が形成した扇状地性平坦面と、元茨木川などの氾濫原面に成立した、弥生時代から中世の複合遺跡である。包蔵範囲は、茨木市南部の若草町・東奈良・天王などにわたる南北約1.4km、東西約1kmに広がっており、その中核は、阪急京都線とJR貨物線が交差する付近を中心とした、弥生時代前期から古墳時代前期の環濠集落である。本調査地は、遺跡の西限域となる大正川（旧境川）から阪急京都線にかけての低地部に位置する。当地区は、現在の近畿自動車道下の解析谷に注ぐ、大溝や河道が集中する地区である。既往の調査では、弥生時代中期から後期の方形周溝墓や古墳時代前期の土壙墓群、中世の掘立柱建物などが検出されており、おもに弥生時代から古墳時代にかけての墓域と考えられている。当地は、土壙墓群の100m程西方にある。土壙墓群以西では、洪水層が顕著にみられるなど生活面としては不安定な地盤を呈し、包含層・遺構も断続的で希薄なものとなる。発掘調査に至った例では、当地南方の昭和51年度調査地や平成6年度調査地において、弥生時代の方形周溝墓状遺構などが検出されている。本調査地では、長雨で地盤が軟弱であったため、新築工事への影響を考慮し、前庭部分に小さくトレチを配置した。

遺構と遺物 当地の現地表面は、標高約9.0mを測る。層序は、第1層 現代盛土層、第2層 暗青灰色粘質土（酸化沈積物を含む水田耕土）、第3層 暗灰色シルト（水田耕土）、第4層 黒色粘質土（植物遺体含む腐植土）、第5層 灰色砂混粘質土（整地土）、第6層 灰白色砂、第7層 灰白色粘質土、第8層 灰白色砂質土となる。これまでの近隣の試掘データと同じく、全体に灰色を帯びた細粒質の堆積物からなるが、現地表下約1mで黒く土壤化した第4層を認めたため、包含遺物の確認と第5層上面での精査を実施

した。その結果、第4層は植物遺体を含むものの土器などの遺物は出土しなかった。第5層との層界は不規則で、第4層が帶水して泥状であったことを示していた。これに上層からの耕起による搅乱も加わっており、遺構は検出されなかった。また、第5層は整地土であるが、遺物は出土しなかった。第6層以下は、自然堆積層と判断



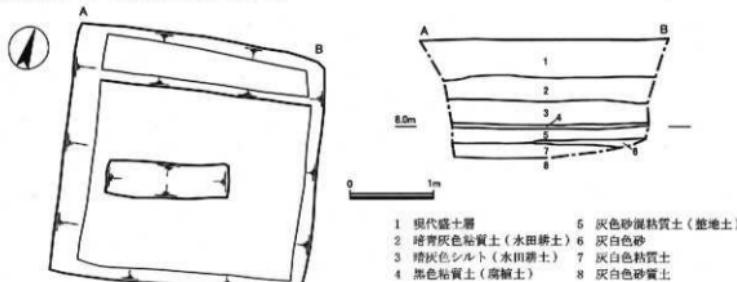
第32図 調査位置図



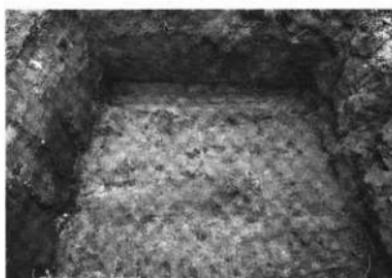
第33図 調査区配置図

される。

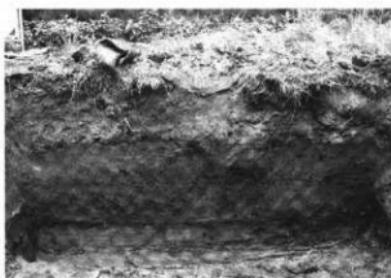
まとめ 当地では、土壤化した堆積層を確認したが、包含層ではなく湿地性の腐植土であった。その下層には整地層が存在するところから、これらは、帶水して腐植した旧水田耕土と、その床土であったのではないかと考えられる。その後は地盤状況が改善され、現代の水田耕土が形成されていったものとみられる。



第34図 調査区平面・断面図



調査区掘削状況（南から）



北壁断面検出状況



調査地近景（西から）



調査風景（西から）

第35図 発掘調査風景

9. 中条小学校遺跡

所在地 茨木市奈良町584-4・584-8

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年7月14日～15日

調査面積 8m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

経過 中条小学校遺跡は、新中条町にある中条小学校を中心に、南北約0.8km×東西に約0.4kmの西中条町・下中条町・小川町にかけて南北に長細く広がる、弥生時代中期から中世にかけて継続的に営まれた複合的な集落遺跡である。今回の調査地は中条小学校遺跡のほぼ南限に、また東奈良遺跡の包蔵地に近接した地域にあたる。その南方に位置する東奈良遺跡は、弥生時代前期から中・近世頃にかけての集落跡で、近年には弥生時代中期後半頃の環濠の底から小銅鐸が発見された。また、北方には弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての住居跡がみられる駅前遺跡が存在する。中条小学校遺跡の当市教育委員会による既往の調査では、古墳時代中期頃の掘立柱建物跡を中心とした住居跡や円墳といった群集墳などの古墳が多く見られる。なお、中条小学校遺跡の包蔵面積は、約38万2千m²となる。

今回の調査においては、主に弥生時代後期から古墳時代と中世頃の生活面を調査の対象とした。

基本層序 基本層序については、第1層～第7層に大別する事ができる。層序は上層より順に、第1層は現代の造成盛土を含む層である。層厚は、全体を通して概ね0.7mを計る。第2層は旧耕作土で、層厚は概ね0.15mを測る。第3層は灰褐色粘質土の土性を持つ、層厚約0.1mの層である。第4層は、褐色粘質土の土性を持つ、層厚約0.05mの層である。第5層は、黄灰色粘土の土性を持つ、層厚約0.05mの層である。第6層は、褐灰色粘土の土性を持つ、層厚約0.05mの層である。第7層は、黄色粘土の土性を持つ、地山層となる。

検出遺構 今回の調査では、中世頃の生活面を主とした第1遺構面と古代頃のそれを主とした第2遺



第36図 調査位置図

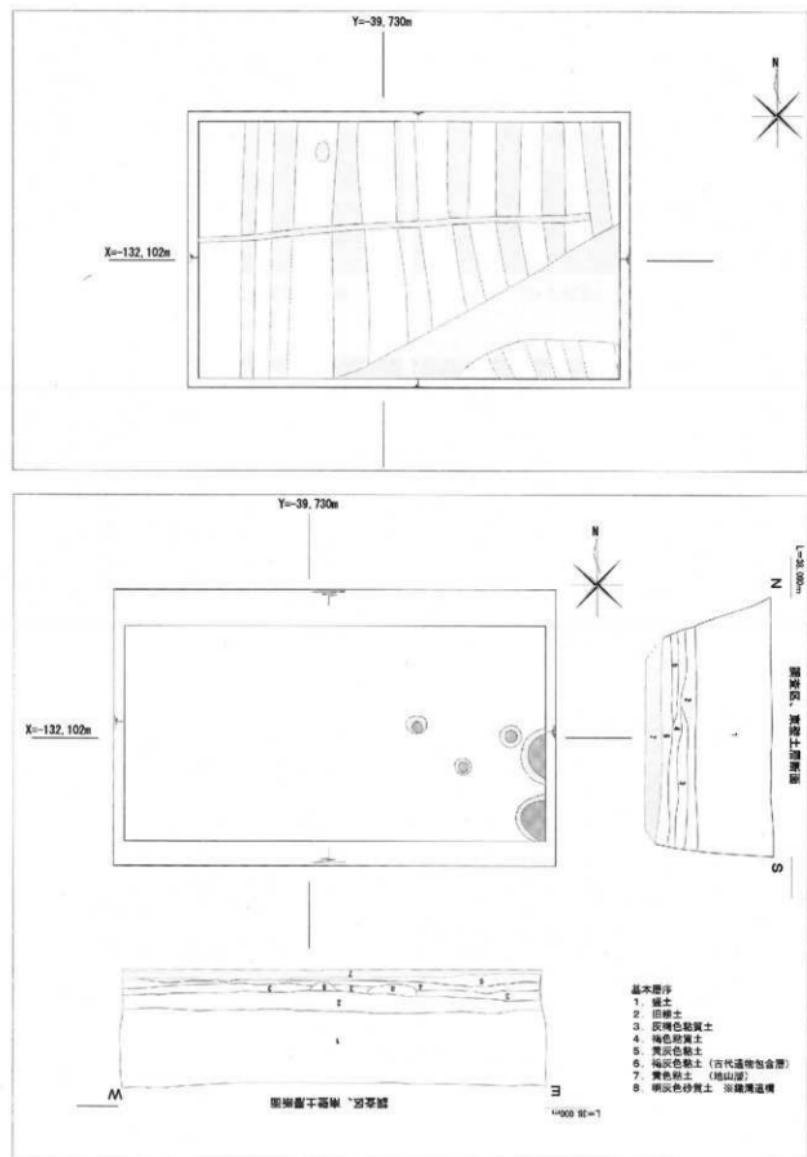


第37図 調査区配置図

構面の2面を調査の対象とした。第1遺構面では、耕作地を構成するうえで必要な鋤溝を8条、検出した。これらの鋤溝はほぼ条里に沿う形で、南北方向で検出された。この他には、鋤溝を切る形で東西方向に走る溝状遺構2条、ピット状遺構1基を検出した。第2遺構面ではピット状遺構3基、土壙遺構2基を検出した。これらの遺構は調査区内の東よりに顕著に見られ、中央から西半部においてはやや希薄に映る。

出土遺物 今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド(縦14cm×横36cm×奥行き56cm)に換算して1箱分である。その種類と内訳は、中世頃の陶磁器や古墳時代の須恵器、土師器などの遺物が出土している。

まとめ 今回の調査から、第1遺構面では中世頃の生活遺構面を検出し、また、第2遺構面では弥生時代後期頃から古墳時代初頭にかけての生活遺構面を検出した。それぞれの時代において、集落を構成するうえで必要な各遺構が検出された。これらの成果を基に、今後は既往の調査と照らし合わせて、中条小学校遺跡の集落の歴史的背景を検討してあきらかにしていきたい。

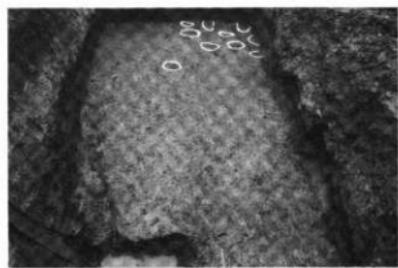




調査地全景（北東より）



第1遺構面、遺構検出状況（東より）



第2遺構面、遺構完堀状況（西より）



調査区東壁土層断面、現G L - 1.1m



第2遺構面 直上精査中出土遺物



第2遺構面 直上包含層内出土遺物

第39図 遺構検出状況・出土遺物

10. 牟礼遺跡

所在地 茨木市園田町14-33

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年7月20日

調査面積 9 m²

調査担当 関 梓

調査結果

経過 牟礼遺跡は、茨木市の南東部、安威川中流の右岸の沖積地に位置する。遺跡は中津町、園田町を中心とした東西約0.6km、南北約0.8kmの地域を範囲とする。

牟礼遺跡は、昭和60年に中津町における商業施設の建設工事に伴う調査で発見された。

調査では、縄文時代晩期に相当する井堰とともに自然流路や水田面の存在が確認され、畿内における稻作の開始時期が縄文時代にまでさかのばる事例として注目をあつめた。

また、その周辺の地域においても発掘調査がおこなわれ、弥生時代前期から中世までの遺構や遺物が確認されたことから、拠点となる集落の存在があきらかとなった。

だが、牟礼遺跡における縄文時代から弥生時代の遺構検出面は現在の地表面(GL)からかなり深い層で検出される。このことから、小規模な調査では遺構検出が困難であり、遺跡の詳細な様相はまだわかつていない。

今回の調査地が位置する園田町は、遺跡範囲の中でも発掘調査がほとんどおこなわれておらず、遺跡内でもその様相が不明な地域である。

調査区は、敷地面積や掘削度量を考慮して、南北3m、東西3mの範囲を設定した。

基本層序 現地表面は、標高約7.2mをはかる。現地表面から約-1mで包含層上面を検出した。層序は、上層より第1層(現代盛土層)が層厚0.9m、第2層(旧耕作土層)が層厚0.15m、第3層(7.5GY5/1緑灰色シルト)が層厚0.1m、その下に遺物包含層である第4層(7.5YR3/2黒褐色砂質土にマンガン含む、部分的に5GY5/1オリーブ灰色砂含む)が層厚0.2mであった。包含層直下にあたる第5層は砂層(10Y5/1灰色粗砂から中砂)であり遺構は確認されなかつた。層厚は0.2mである。

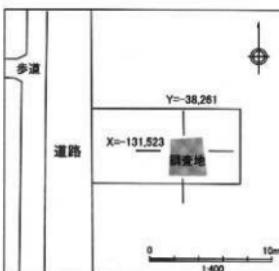
その下の第6層(N4/0灰色粘質土)は坪掘りで土層確認をおこない、層厚は0.2mであった。

検出遺構 包含層上面において遺構は検出されず、また包含層直下の層も粗砂による堆積層であり遺構は確認されなかつた。

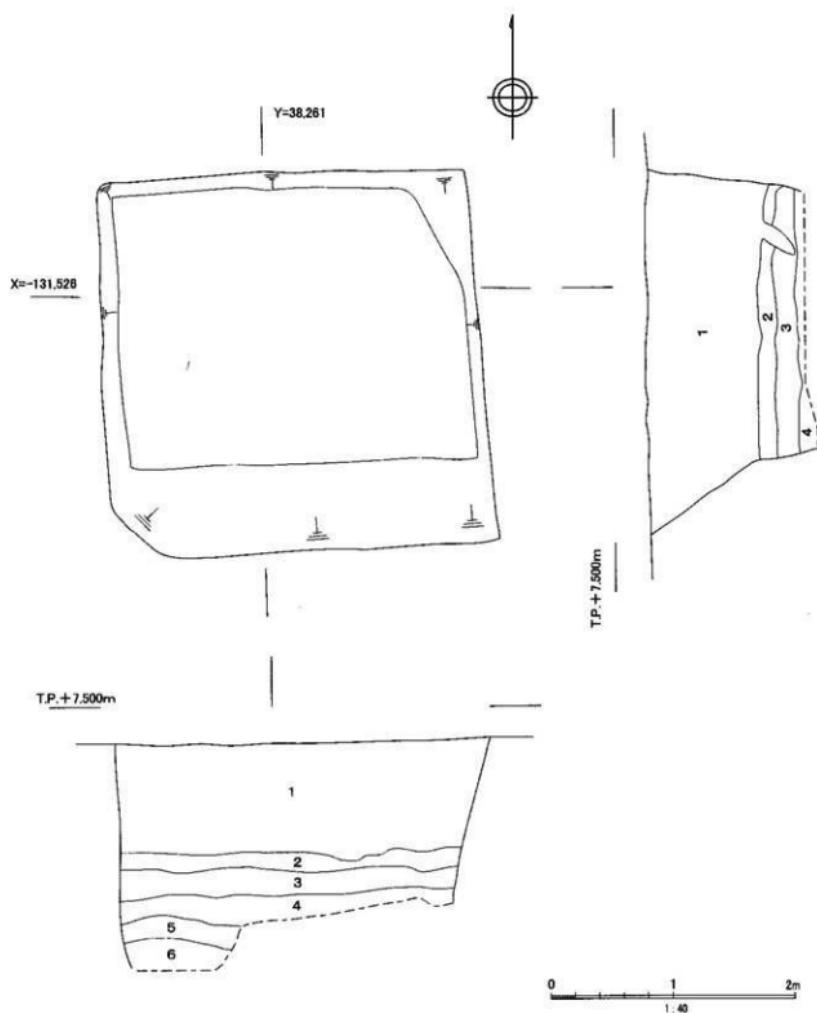
出土遺物 包含層から多量の土器片(コンテナにして約1/5箱)が出土した。



第40図 調査位置図



第41図 調査区配置図



1. 盛土
2. 10GB3/1暗青灰色シルト(旧耕作土)
3. 7.5Y5/1緑灰色シルト
4. 7.5YR3/2黒褐色砂質土に5GY5/1オリーブ灰砂混じる、
マンガン多く含む(遺物包含層)
5. 10Y5/1灰色粗砂
6. N4/0灰色粘質土

第42図 平面・断面図

内容は大半が弥生土器の壺、甕や高杯の体・底部片であるが、なかには少量の須恵器片や土師皿や瓦器碗、羽釜といった遺物も含まれる。

遺物の時期は、弥生土器については高杯の脚部の破片などから弥生時代後期に該当するものと考えられる。また、弥生土器の遺物については碎片であり時期の特定は困難であったがおむね中世の範囲に収まるものと考える。

まとめ 今回の調査では、弥生土器片を多量に含む遺物包含層を確認した。しかし、土器片が細片であり、同一の包含層からの出土遺物には少量ではあるが時期がくだり中世とものと考えられる遺物も含まれていた。

この包含層は、固くふみかたまった状態であり、さらに、この遺物包含層の下層確認をしたところ。砂層と粘質土層が互層になった地盤の弱い土地であった。

のことから、この包含層が調査地に本来あった層ではなく、土地の整地に用いるために周辺地域から運びこまれた客土である可能性が高いと考える。

しかし調査面積が狭く、十分な検討を行えるだけの情報を得ることができなかった。

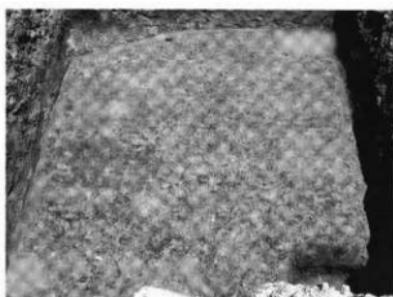
今後の発掘調査における資料の増加に期待したい。

参考文献

「牟礼遺跡」『茨木の史跡』 1998年 茨木市教育委員会



調査地全景（西から）



包含層検出状況（西から）

第43図 発掘調査風景

11. 春日遺跡

所在地 茨木市春日五丁目46-7

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年7月26日

調査面積 約9m²

調査担当 関 梓

調査結果

経過 春日遺跡は、茨木市の西北部、千里丘陵から千里丘陵からのびる低位段丘と茨木川が形成した扇状地に位置し、南北に1.2km、東西に0.7kmに範囲を有する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。

遺跡の北西部を郡遺跡、北東部を倍賀遺跡と接しており、今回の調査地は春日遺跡と倍賀遺跡のちょうど境界に位置している。

春日遺跡は、古墳時代中期から後期のかけての時期にその規模が最大となることから、近隣と遺跡とともにこの地域の拠点集落を形つくっていたと考える。

今回の調査は、個人住宅建築に伴い柱状改良工事がおこなわれることから埋蔵文化財の発掘調査を行うこととなった。

調査区は住宅密集地に位置し、掘削土量の関係から南北3m、東西3mの範囲を設定した。

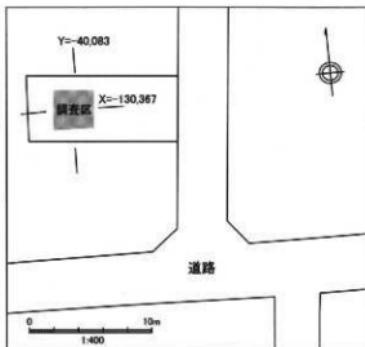
基本層序 現地表面は、標高約16.7mをはかる。現地表面(G L)から約-1mで地山を確認した。層序は、上層より第1層(現代盛土層)が層厚0.7m、第2層(旧耕作土層)が層厚0.1m、第3層(10Y5/1灰色砂質土に極細礫含む)が層厚0.1m、第4層(10Y5/1灰色に5Y6/6オリーブ粘質土ブロック多く含む)が層厚0.1m、第3層と第4層は耕作歴土である。その下に第5層(10YR4/2灰黄褐色粘質土、鉄分粒がまだらにはいる)があり、土器片を含む遺物包含層である。層厚は約0.2mである。第5層の下層で地山(遺構面)を確認した。地山検出のレベルはT.P.+15.5mであった。

検出遺構 今回の調査では、遺物包含層直下の遺構面で南北にはしる溝(SD01)を検出した。溝の幅は約1.2m、深さ約0.5mをはかる。溝の埋土から土器などの遺物は出土しなかった。

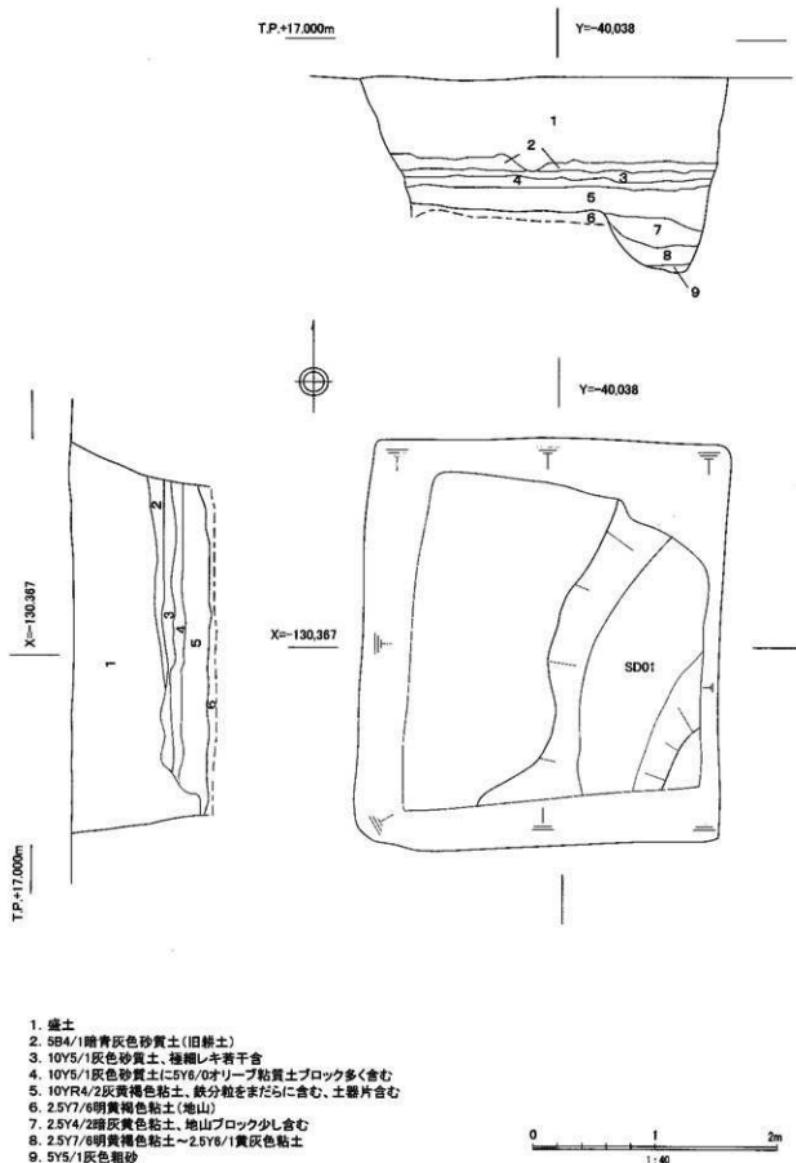
出土遺物 出土遺物は、包含層より数十点の土師器片や須恵器片が出土した。土師器片はいずれも細片であり、器種や時期を特定できるものではなかった。須恵器片には、1点口縁が残っている杯蓋の破片があり時期は7世紀前半と考える。それ以外の破片については時期を特定することができなかった。また、いずれの破片も細片で磨耗しており、図化に耐えうるものではなかった。



第44図 調査区位置図



第45図 調査区配置図



第46図 平面・断面図

まとめ 今回の調査において検出した溝は、遺構埋土からの出土遺物がないため時期を特定することが困難である。近隣での既往の調査では、地山面上層において古墳時代後期の建物の柱穴などが多く検出されており、また今回の調査における包含層からの出土遺物の時期から鑑みて、今回検出した遺構も古墳時代後期のものである可能性が高いと考える。

なお、今回の調査において検出遺構が溝のみであったことは、この付近がちょうど集落の縁辺部にあたることに起因していると考える。

今回の調査区は春日遺跡と倍賀遺跡の境界に位置し、遺跡範囲において既往の調査事例が少ない、空白地となっている地域に位置する。今回の調査では、調査面積が狭く詳細な検討を行えるだけの情報を得ることができなかつたが、今後の調査において遺跡の様相を考えるうえでの一資料となればと考える。

参考文献

『平成8年度発掘調査概報』 1992 茨木市教育委員会



調査区全景（東から）



遺構完掘状況（北から）

第47図 発掘調査風景

12. 太田茶臼山古墳

所在地 茨木市太田三丁目158-1の一部

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年7月28日

調査面積 約10m²

調査担当 中東 正之

調査結果

経過 太田茶臼山古墳は、北摂山地の南端部である低位の洪積段丘上（富田台地）に築造された古墳時代中期の大型前方後円墳である。本調査地は、太田茶臼山古墳の後円部側外堤上に位置する。北に高く南に低い緩傾斜地を基盤とするため、外堤部は南北で約2mの比高差を有する。外堤部の既往の

調査としては、前方部側で茨木市教育委員会、後円部側で大阪府教育委員会の調査などが実施されており、外周を廻る埴輪列の存在が確認されている。当地に近い昭和47年調査地では、現在の周濠外縁より約17m外側で埴輪列を検出している。当地はこの埴輪列推定線に該当しているため、その検出を目的に調査を実施した。

遺構と遺物 当地の現地表面は、標高約33.6mを測る。層序は、第1層 褐灰色礫混土（宅地造成土）、第2層 黄褐色礫混土と褐灰色土の混土（宅地造成土の一部、埴輪含む）、第3層 褐灰色土（宅地造成以前の表土、腐植質で埴輪含む）、第4層 にぶい黄褐色礫混土（搅乱土、埴輪含む）、第5層 黄褐色礫混土（盛土）、第6層 褐色礫混土（盛土）、第7層 明黄褐色礫混粘質土となる。第7層から礫が優勢となり締まりが強くなるため、地山層（洪積層）とみて、掘削をその上面までとした。第3～6層は、宅地造成以前に外堤を構成していた盛土である。第5層は、遺物は包含しないが、締まりがわるく、幾度かの搅乱が加えられているようである。第6層は、やや土壤化しているが、均一で締まりがあるため、原初の外堤盛土の可能性がある。出土遺物は、ほとんどが円筒埴輪の胴部と思われる小破片で、樹立位置を保つような出土状況のものは無かった。調整は、摩滅により不明なものが多いため、胎土や形態にはまとまりが感じられ、5世紀中頃から後半の時期（川西編年IV期）に収まるものと考えられる。第51図1は、第2層出土の土師質円筒埴輪の突帯部分である。調整は不明である。2は、第3層出土の同じく突帯部分であるが、土師質と須恵質の中間質を呈する。外面横ハケ、突



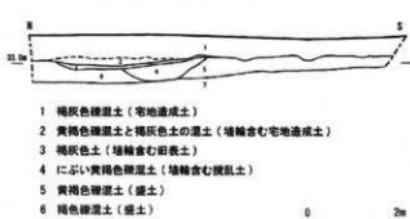
第48図 調査位置図



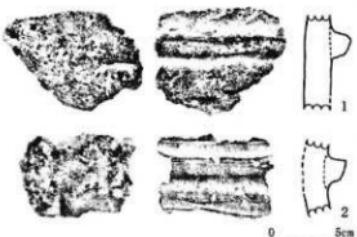
第49図 トレンチ配置図

帶上面には強いナデを施す。ほかには、内面ナデや内外面ハケが確認できるものもみられる。

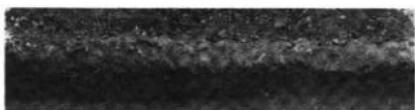
まとめ 当地では、宅地造成以前、埴輪が表面に散布する状況であったことが窺われるが、原位置を保つ埴輪は検出されなかった。埴輪列は、近年の宅地化や、それ以前の土地改変によって削平・破壊されているものとみられる。築堤状況については、現地表面から1m前後で地山層が顔をのぞかせている。埴輪の樹立面を捉えることはできなかつたが、基盤の高い後円部側外堤にあたる当地では、ほとんど地山層を削り出しただけで形成されていたと考えられる。



第50図 東壁断面図



第51図 出土埴輪



東壁断面



調査風景 (南から)



トレンチ全景 (北から)

第52図 発掘調査風景

13. 中条小学校遺跡

所在地 茨木市下中条122-4・122-6

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年8月16日～17日

調査面積 約56m²

調査担当 関 桦

調査結果

経過 中条小学校遺跡は、茨木市の中央部、千里丘陵から派生した低位段丘と茨木川が形成した沖積面に位置し、中条小学校を中心に南北約1km、東西0.4kmの広さを有する弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡である。

今回の調査地は中条小学校遺跡の中でも北西部に位置している。近隣の調査では、平成20年度の発掘調査で中世の遺構面と弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構面が確認されており、平成8年度の調査では弥生時代後期の溝や柵列、掘立柱建物、土壙などが確認されている。

調査は個人住宅新築工事に伴うものであり、南北約7m、東西約8mの調査区を設定し、調査区を二分割して反転調査をおこなった。

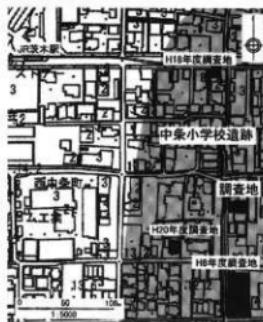
基本層序 現地表面は、標高約11.8mをはかる。現地表面から-1mで遺構面を地山層の上面で確認した。層序は、上層より第1層（現代盛土層）が層厚約0.6m、第2層（10YR5/1褐色灰粗砂に10YR7/6明黄褐色砂含む）が層厚0.3m、第3層（2.5YR6/1黃灰色粘質土に2.5Y5/4黃褐色粘質土混じる）が層厚約0.2m、第4層（7.5YR5/1褐色灰粗砂に7.5YR5/8明褐色粘質土含む）が層厚0.1mであり、その下層の地山面（10YR7/1灰白色粘質土に10YR7/8黃褐色粘質土含む）で遺構を確認した。遺構面検出レベルはT.P.+10.8mである。

検出遺構・出土遺物 地山面で数基のピットを検出したが、遺物が出土せず、時期の特定はできなかった。

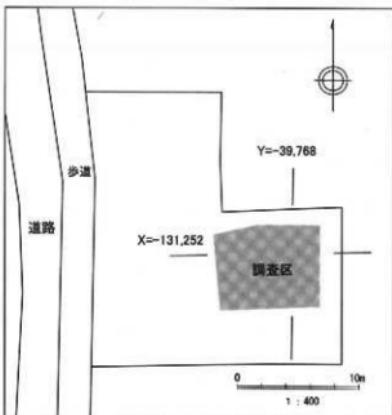
まとめ 今回の調査区では、包含層が確認されなかつたことから、後世に大きく削平を受けていると考えられる。近隣での既往の調査例から地山面からは弥生時代後期から古墳時代前期と想定される数多くの遺構が検出していることから、今回の調査において検出した遺構の時期についても弥生時代後期に相当する可能性が高い。

参考文献

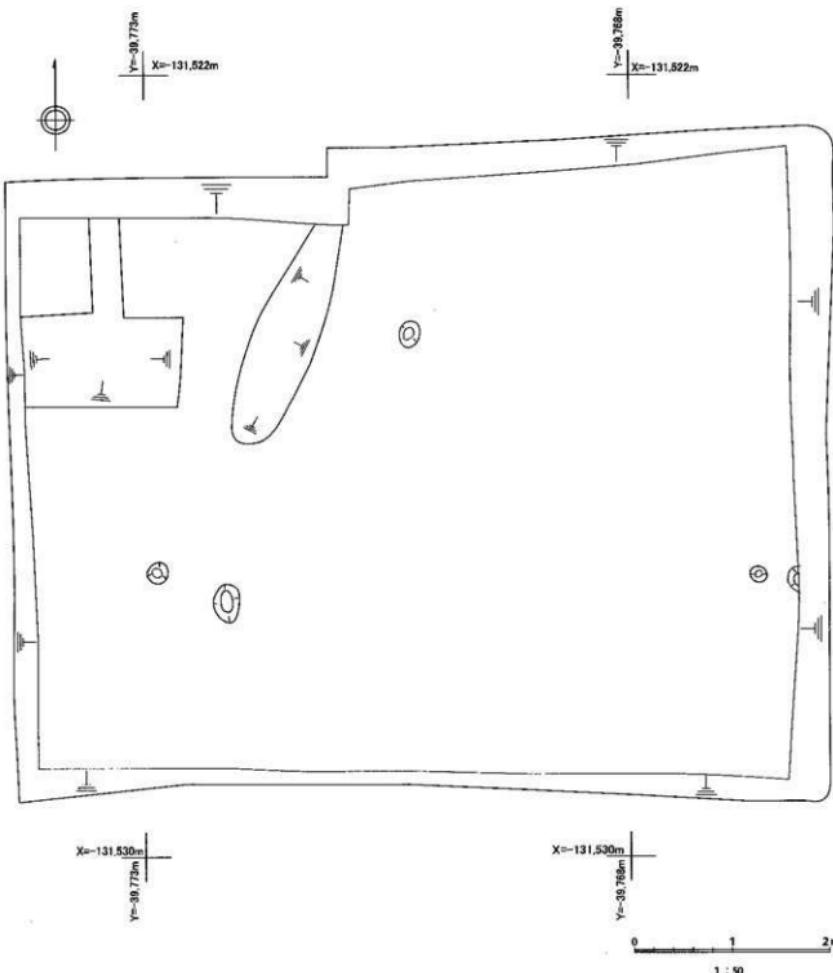
『平成20年度発掘調査概報・個人住宅建築に伴う発掘調査報告』 2009年 茨木市教育委員会



第53図 調査位置図



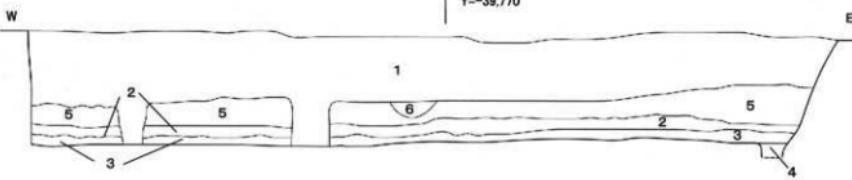
第54図 調査区配置図



第55図 平面図

北壁土層断面

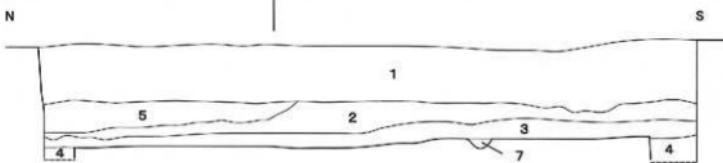
T.P.+12.400m



東壁土層断面

T.P.+12.400m

X=-131,525

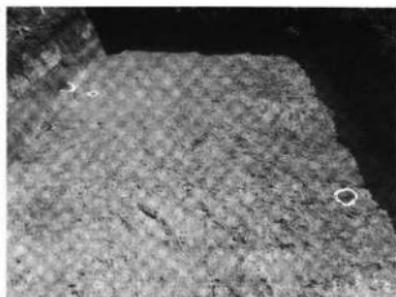


- 1. 塗土
- 2. 2.5Y6/1 黄灰色粘土 [に 2.5Y5/4 黄褐色粘土混じる]
- 3. 7.5YR5/1 黄灰色粘質土 [に 7.5YR5/8 明褐色粘質土含む]
- 4. 10YR2/1 灰白色粘土 [に 10YR7/8 黄褐色粘土含む (地山)]
- 5. 10YR5/1 黄灰色粗砂 [に 10YR7/8 明黄色粗砂含む]
- 6. 7.5YR4/2 黄褐色粘質土 (造構塙土)
- 7. 7.5YR5/1 黄灰色粘質土 (造構塙土)

第56図 土層断面図



西侧調査区完掘状況（南から）



東側調査区完掘状況（北から）

第57図 発掘調査風景

14. 牟礼遺跡

所在地 茨木市中津町855-3

開発事業 個人住宅建設事業

調査期間 平成22年8月18日

調査面積 約12m²

調査担当 富田 卓見

調査結果

経過 牟礼遺跡は、阪急茨木市駅東側で、茨木市東部を南北に流れる安威川右岸の冲積地に立地する縄文時代晚期から中世の複合遺跡である。遺跡包蔵範囲は、中津町・園田町を中心とした東西約600m・南北800mに及ぶ。当遺跡周辺には、同じ安威川の中下流域に所在し、文献資料上にたびたび登場する溝昨（杭）庄の推定地である溝杭遺跡や、縄文時代晚期の土器、弥生時代中期の「人面付き土器」が出土した目垣遺跡などがある。

昭和60年に中津町の大型店舗建設に伴う発掘調査（第1次調査）において、縄文時代晚期の土器（滋賀里4式～長原式）と井堰を伴う自然流路や水田面を検出し、茨木市内でも数少ない縄文時代の遺跡として注目された。他には、今回の発掘調査地東側隣接地にて平成13年に行なわれた共同住宅建設に伴う発掘調査では、古墳時代前期初頭（庄内併行期）の土器と平鉢・なすび形又鋤などの木製品を伴う流路、その下位層から縄文時代晚期の船橋式～長原式と考えられる土器群が出土した。その後も当地周辺にて調査は行われているが、包含層・遺構面が比較的深い層位に存在し、また地盤が弱く湧水も頻繁に発生するため、個人住宅建替え等の小規模の調査では満足な情報が得られないことが多い状況である。

調査方法 既往の調査によって、本調査地周辺の地盤が弱いことが判明していたため、安全面を考慮し、隣接する住宅や道路との距離をとり調査区を小さめに設定した。その結果、掘削深度を浅くせざるを得ず、オープンカットで調査を行った。中世面と推測される第1面まで掘り下げ記録作業を行なった後、南壁の一部をさらに掘り下げて下層確認を行なった。

基本層序 まずGL - 0.7mまで盛土が造成されていた。その下に、にぶい黄褐色粘質土層（層厚約0.15m）、砂混じり灰褐色粘質土・マンガン粒が多く含む層（層厚約0.13m）、薄青灰色～灰褐色粘質土層（層厚約0.1m）が続く。さらに下層で、青灰色～暗青灰色層（層厚約0.4m）がある。砂と粘質土がラミナ状に堆積していることから、安威川の氾濫時に堆積した洪水層と推測される。その直下で暗灰褐色粘土層（層厚約0.2m）を検出した。周辺の既往の調査ではこの層上面が中世の遺構面とされており、当調査地でも面の直上で瓦器や土師器の細片等が出土し



第58図 調査位置図



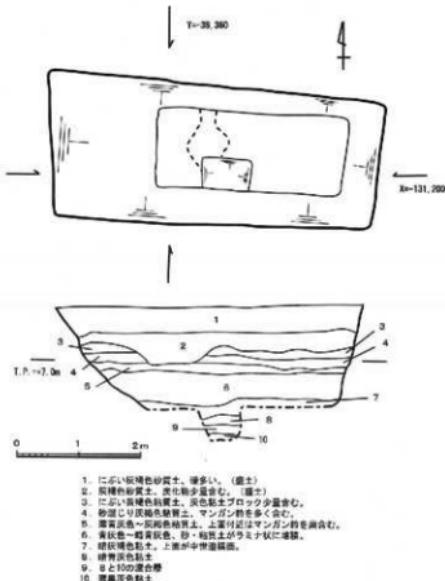
第59図 調査区位置図 (S=1/500)

た。この層より下は、暗青灰色粘土層、薄黒灰色粘土層と続く。

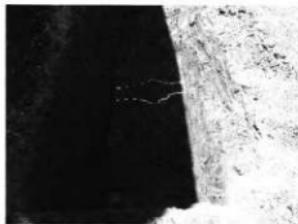
検出遺構 暗灰褐色粘土層上面を第1面として精査を行った。その結果、上層の洪水層の削り込みが平面で確認されたのみで、遺構は検出しなかった。

出土遺物 第1面直上にて、中世の土器片が出土した。瓦器碗底部片は、内側の暗文が少なく、高台部分は細い粘土紐を貼り付けた後、軽くナデ調整されている。鎌倉時代前期頃のものと推測される。「ての字口縁」の土師皿片は、口縁形状から平安時代後期頃のものと思われる。

まとめ 今回は調査区が狭小だったため、上層の中世面を記録するにとどまった。牟礼遺跡は繩文時代晩期の土器が出土しているなど、茨木市内の中でもかなり早い時期から人々の生活の痕跡が認められる遺跡であるが、中世においても安威川の水利を利用し、生活していた様子が伺える。今後も周辺を発掘することで、牟礼遺跡の性格がより明らかになることを期待したい。



第60図 調査区 平面、土層断面図(S=1/80)



調査区 完掘状況（東より）



調査区 南壁土層断面状況



出土遺物

第61図 完掘状況・出土遺物

15. 耳原遺跡

所在地 茨木市耳原二丁目487-14・494-8

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年8月19日

調査面積 12m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

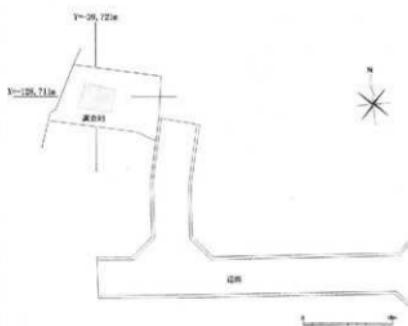
経過 耳原遺跡は、縄文時代晚期頃から中世頃にかけて広がる複合集落遺跡である。遺跡の広がる範囲は、耳原一丁目から同三丁目、南耳原二丁目にかけて東西約350m×南北約300mが遺跡の包蔵地である。遺跡の包蔵地面積は、約35万4千m²を占める。当遺跡は市内の中央部のほぼ東側にあたり、茨木川左岸及び、安威川の右岸の二河川に挟まれた舌状の丘陵上に位置する。既往の調査の一例として、昭和55年度の名神高速道路開通に伴う発掘調査が挙げられる。この調査で、縄文時代晚期（滋賀里Ⅲ式・船橋式・長原式）の甕や（深鉢）棺墓が16基検出され、また、石鎚が50点以上も出土している。平成に入ってからは、同16年度の耳原遺跡の一次調査において、耳原三丁目地内にある耳原古墳と鼻摺古墳の中間地点に存在した丘陵地上で、6世紀後半頃から7世紀初期頃に築造したと考えられる「耳原西古墳」が新発見された。

基本層序 基本層序については、第1層～第5層に大別される。層序は上層より順に、第1層は現代の盛土層で搅乱・造成盛土を含む層である。層厚は約1.1mを測る。第2層は、灰色粘性砂質土を主体とし、淡黄色微砂の土性を持つ層で、層厚は約0.3mを測る。第3層は灰色砂質土を主体とし、橙色微砂の土性を持つ層で、層厚は約0.1mを測る。第4層は、明灰褐色粘質土を主体とし、褐色微砂の土性を持つ層で、層厚は約0.2mを測る。第5層は、明黄褐色砂質土を土性に持つ層で、地山層になる。なお、弥生時代以降にあったと考えられる包含層等は、後世の整地により削平を受けていた。

検出遺構 現地表面は、標高約19.8mを測る。先に述べたように弥生時代以降にあったと考えられる包含層等は、後世の整地により削平を受けていた事から、最終面の地山層上面において検出された弥生時代の生活面を調査の対象とする事とした。こ



第62図 調査位置図



第63図 調査区配置図

の生活遺構面において、溝状遺構1条を検出した。この溝状遺構は、検出長約1.7m、幅約1.5mの大溝で南北に走る。なお、この大溝は調査区外（北東）に伸びる事から、その概要是詳しくは分からなかった。

出土遺物 弥生時代の土器の細片が、遺物包含層及びSD-01から出土している。但し、いずれの土器においても細片や摩滅したものであり、実測出来るようなものはなかった。

まとめ 今回の調査から、弥生時代の生活遺構の一部を検出した。これらの成果を基に、今後は既往の調査と照らし合わせて、耳原遺跡の集落の歴史的背景を検討してあきらかにしていきたい。

参考文献

『昭和57年度発掘調査概報』 昭和57年3月 茨木市教育委員会

『平成17年度発掘調査概報』 平成17年3月 茨木市教育委員会

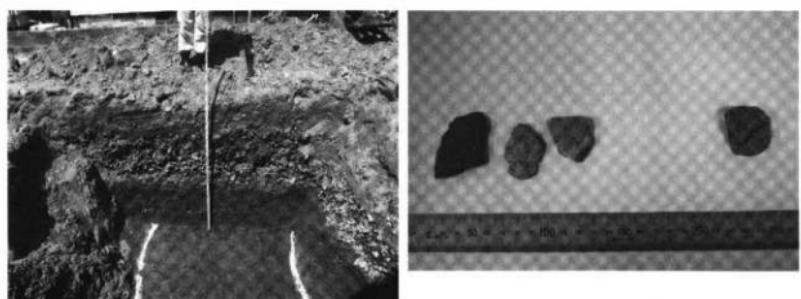
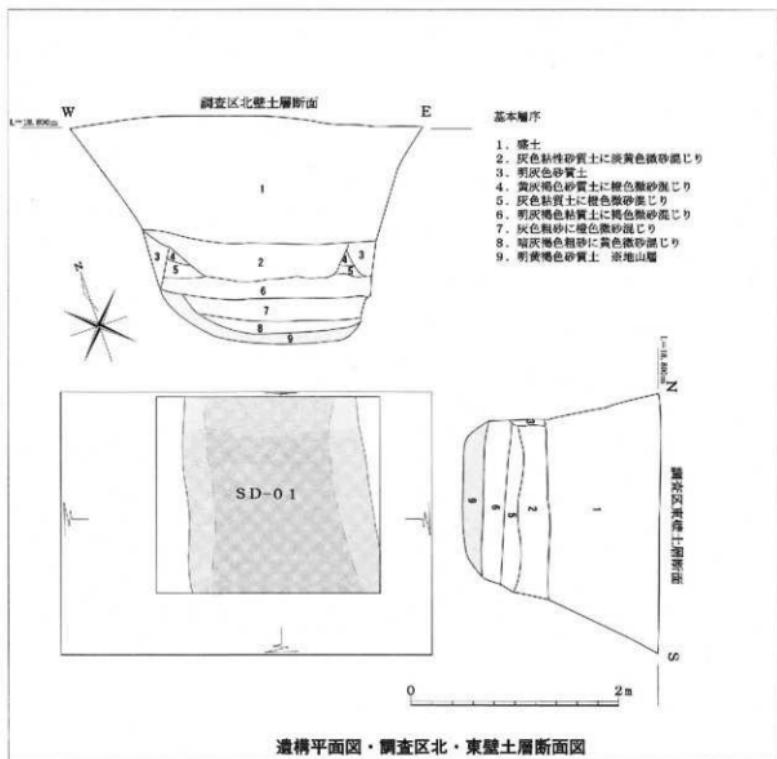


調査地全景（南東より）



調査風景（南西より）

第64図 発掘調査風景



第65図 造構平・断面図、遺物写真等

16. 目垣遺跡

所在地 茨木市目垣二丁目746-6他

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年8月23日

調査面積 24m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

経過 目垣遺跡は、目垣一丁目～三丁目にかけてやや不整形ながら、南北約0.68km×東西約0.36kmに広がる、弥生時代前期から中世にかけて継続的に営まれた複合的な集落遺跡として知られる。目垣遺跡は、安威川東岸及び淀川西岸に挟まれた標高約1～2mの低湿地上に立地している。昭和48年に電力会社の送電線用の鉄塔工事の際に、弥生土器が出土した事が遺跡発見の契機となった。また、平成9年度の調査では縄文時代晚期後半頃の深鉢の破片（船橋式）が見つかっており、なかでも特筆すべき遺物として人面付き土器が挙げられる。この人面付き土器は、甕（弥生時代中期後半頃）などの日常什器と一緒に供伴

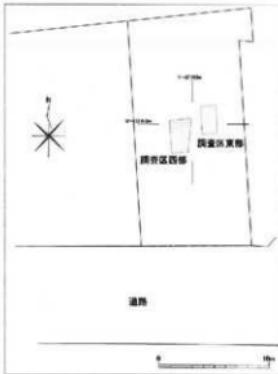
する形で土壙遺構から出土したものである。この他に大型石包丁や大型蛤刃石斧、偏平片刃石斧といった石製品も出土している。その後、古代から中世頃にかけて土豪であった溝杭氏がこの地を支配していたとされる。なお、目垣遺跡の包蔵面積は、約13万4千m²となる。

今回の調査においては、主に中世頃の生活面を調査の対象とした。なお、今回は平成22年度の目垣遺跡における第1次調査となる。

基本層序 基本層序については、第1層～第6層に大別する事ができる。層序は上層より順に、第1層は現代の造成盛土を含む層である。層厚は、全体を通して概ね1.2mを測る。第2層は、にぶい黄褐色砂質土SL10YR4/3を土性に持ち、層厚は約1.7mを測る中世生活面となる。第3層は、黒色粘質土SC10YR2/1を土性に持ち、炭化物を多く含む層である。層厚は、約0.25mを測る。第4層においては、灰黄褐色粘質土SC10YR4/2を土性に持ち、層厚は概ね0.2mを測る。第5層は、灰オリーブ色粘性砂質



第66図 調査位置図



第67図 調査区配置図

土CL5Y5/2を土性に持ち、層厚は概ね0.05mを測る。第6層は、灰色砂質土SCL5Y5/1を土性に持ち、マンガンを含む層である。層厚は、概ね0.25mを測る。

検出遺構 今回、調査区を西部と東部に分けたが、東部においては搅乱を受け且つ、湧水が大量に出て崩れてくる恐れがあった為、記録保存を目的とした写真撮影のみとした。第1遺構面では、ピット状遺構5基を検出した。存続時期については、ピット状遺構より14世紀後葉頃の土師器皿等が出土している事から室町時代前葉頃に比定できる。第2遺構面では、ピット状遺構2基、溝状遺構1条、土壙遺構1基を検出した。存続時期については、ピット状遺構より13世紀後葉頃の土師器皿等が出土しており、鎌倉時代後葉頃に比定できる。

出土遺物 今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド（縦14cm×横36cm×奥行き56cm）に換算して1箱分である。その種類と内訳は、13世紀後葉頃の瓦器碗や土師器皿、14世紀後葉頃の土師器皿等が出土している。

まとめ 今回の調査では、13世紀後葉頃から14世紀後葉頃にかけての生活遺構面を検出した。土豪であった溝杭氏が、この地を支配していたとされる時期に重複している。なお、当調査地は堀や塹に囲まれたいわば「内郭」に相当する地域になる。これらの成果を基に、今後は既往の調査と照らし合わせて、目垣遺跡の集落の歴史的背景を検討してあきらかにしていきたい。

参考文献

『わがまち茨木 - 城郭編 -』 昭和62年3月 茨木市・茨木市教育委員会

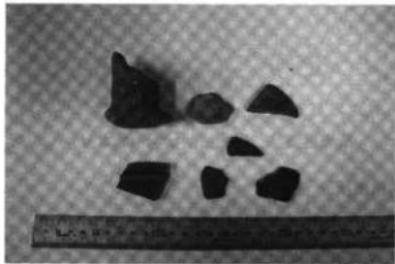
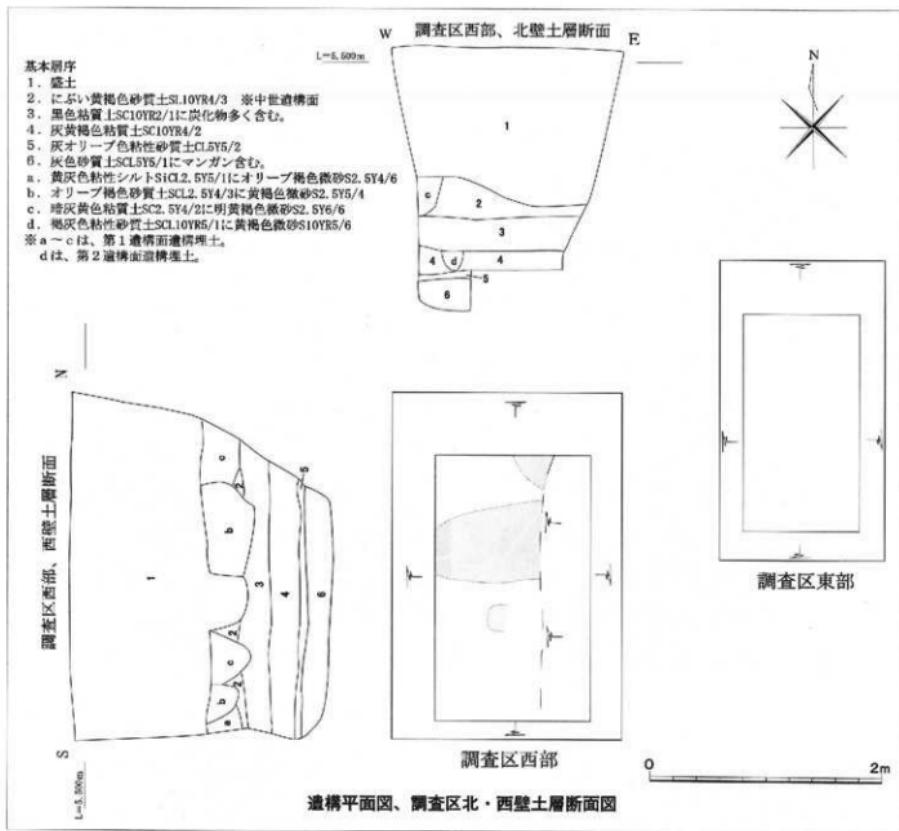


申請地全景（南西より）



調査区西部 遺構面検出状況（北より）

第68図 発掘調査風景



第1遺構面 SD-01埋土上層内、出土土器



第1遺構面 SD-01埋土下層内、出土土器

第69図 平面図、調査区土層断面図



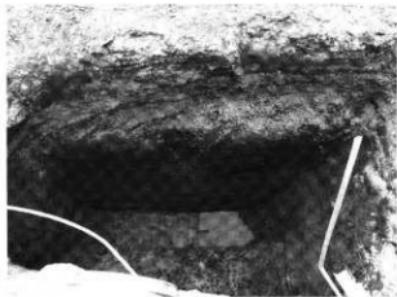
作業風景（南より）



調査区東部 平面掘削状況（南より）



調査区西部 北壁土層断面



遺構面、直上精査中



調査区西部 西壁土層断面



調査区西部 平面掘削状況（北より）

第70図 遺構検出状況

17. 溝昨遺跡

所在地 茨木市五十鈴町245-9

開発事業 個人住宅建設事業

調査期間 平成22年8月31日

調査面積 約11m²

調査担当 富田 卓見

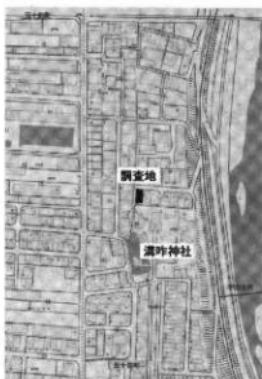
調査結果

経過 溝昨遺跡は、茨木市内南東部の安威川下流域に位置しており、五十鈴町・学園町・学園南町・新堂一丁目にかけて東西約250m・南北約500mの範囲に広がる弥生時代から中世・近世の集落遺跡である。遺跡包蔵地内の安威川右岸には、905年（延喜5年）に完成した「延喜式」の神名帳に、その名が記された式内社の1つである溝昨神社が所在している。当遺跡周辺には、西側に縄文時代晩期の土器が出土した牛札遺跡、南東側に人面付き土器や粘板岩を埋納したピットを検出した目垣遺跡などがある。いずれも安威川下流域に所在し、茨木市内の中でも早い時期に人々の生活が展開された地域である。

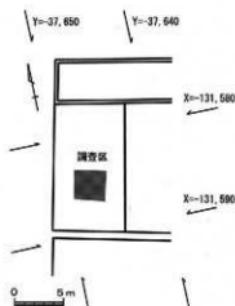
当遺跡については、昭和32年に行なわれた安威川河川改修工事に伴う調査で瓦器碗が出土し、遺跡発見のきっかけとなった。その後、平成6年に行なわれた小規模のトレンチ調査で、平安後期～鎌倉の黒色土器B類の碗などが出土した。平成7年から平成11年には、大阪体育大学（浪商学園）跡地を（財）大阪府文化財調査研究センター（現・（財）大阪府文化財センター）が発掘調査を実施し、安威川対岸に所在する溝昨神社の「上の宮」と推定される遺構を検出、その創建が中世まで遡ることが判明した。平成12年には、平安後期～鎌倉の集落跡を検出し、「溝杭（昨）」の名前が文献上に現れる時期と一致した。この調査地は微高地に位置し、掘立柱建物を中心にお戸や溝で構成されていた。

基本層序 上層より順に、まず既に造成された部分を加えた約1.4m盛土層があり、その直下に層厚約0.1～0.2mの旧耕土層(5Y3/1オリーブ黒色砂質土)がある。その下には層厚約0.45mのオリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土が存在し、さらにその直下に青灰色(5BG5/1)粘土～粘質土がある。西壁の一部を深堀し、この青灰色粘土～粘質土を検出した直後、水が湧き出した。

検出遺構・出土遺物 旧耕土直下のオリーブ褐色土層上面にて遺構検出を行なった。ピット状遺構を1個検出したが、層上面の窪みに上層の旧耕土が混入した可能性が高い。他に、以前当地にあった建物の基礎に使用されたと推測される柱を2本検出した。ピット・柱ともに、ごく最近のものと思われる。遺物は、オリーブ褐色土層から土師器細片を検出した。しかし同層から他に遺物がなかったことから、過去に土地造成を行った際



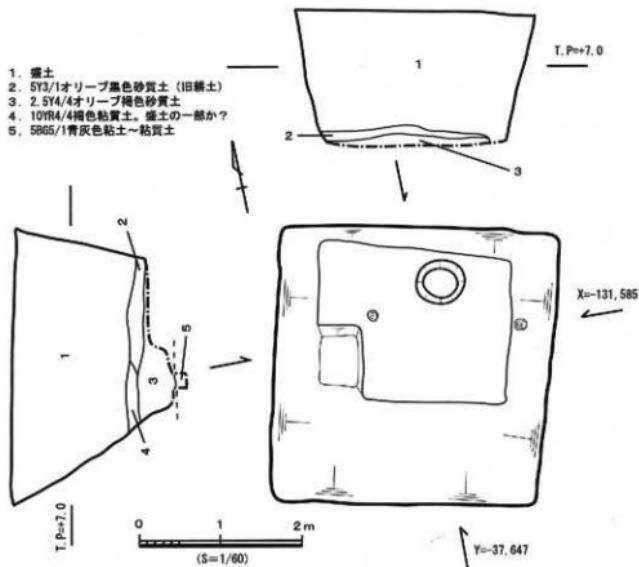
第71図 調査区位置図



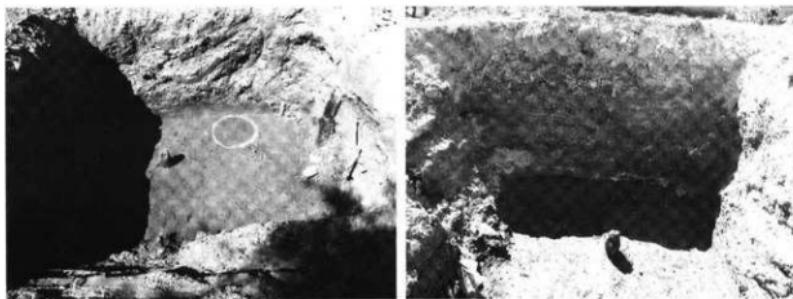
第72図 調査区配置図
(S=1/500)

に流入したものと思われる。

まとめ 今回の調査は、溝昨神社に隣接する地でのほぼ初となる調査で、神社に関連する遺構・遺物が確認できるのではないかと思われたが、調査区が狭く、上層の大部分が盛土であったため、当該層まで到達して調査することはできなかった。しかし、細片ではあるが土師器片が出土していることから、さらに下層には中世～近世にかけての遺構・遺物が存在している可能性が高い。今後の周辺での調査に期待したい。



第73図 調査区平面・土層断面図



調査区 完堀状況（南より）

調査区 西壁土層断面状況

第74図 完堀状況

18. 太田城跡

所在地 茨木市太田一丁目617-5

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年9月13日

調査面積 8.8m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

経過 太田城跡は、太田一丁目に所在する、平安時代末期から中世にかけて続いた城郭跡である。遺跡の包蔵地範囲は東西約0.28m×南北約0.24mの勾玉のような形をしており、その面積は約5万2千m²を占める。今回の調査地は、包蔵地の南東地域に当たる。この太田城を築城したとされる人物は、この地を治めていた太田太郎頼基(太田野太郎丸)と言われているが記録にはなく定かではない。この太田太郎頼基という人物については、承久(1219)～任治(1242)の間に著わされた軍記物語である『平家物語』巻四、源氏物語への事の文中に

その名が記されており、多田源氏の一族とされる。なお、当地区には「城(じょう)の口」、「城の前」という小字が残っており、また城壁の一部とみられる石垣があったという。周辺の既往の調査をみると、当調査地の東方にある東芝大阪工場跡敷地内において平成20年度の調査が行なわれ、その時に弥生時代後期頃の集落跡や古墳時代中期から後期頃の円墳を中心とした古墳群や石敷造構、奈良時代の建物跡などが検出されている。なお、石敷造構については船着き場や道路などの用途が想定されている。

今回の調査においては、主に中世頃の生活面を調査の対象とした。

基本層序 基本層序については、第1層～第5層に大別する事ができる。層序は上層より順に、第1層は現代の造成盛土を含む層である。層厚は、全体を通して概ね1.4mを計る。第2層は旧耕作土で、層厚は概ね0.2mを測る。第3層目は、中世遺物包含層である。土性は暗褐色粘質土SC10YR3/4を主体とし、青灰色微砂S5BG6/1が混じる層となる。第4層は、中世遺物包含層である。土性は褐灰色粘質土SC10YR4/1



第75図 調査位置図



第76図 調査区配置図

を主体とし、それに暗褐色微砂S10YR3/4が混じる層となる。層厚は概ね0.2mを計る。第5層は、黄橙色砂礫S10YR7/8の土色を持つ地山層となる。

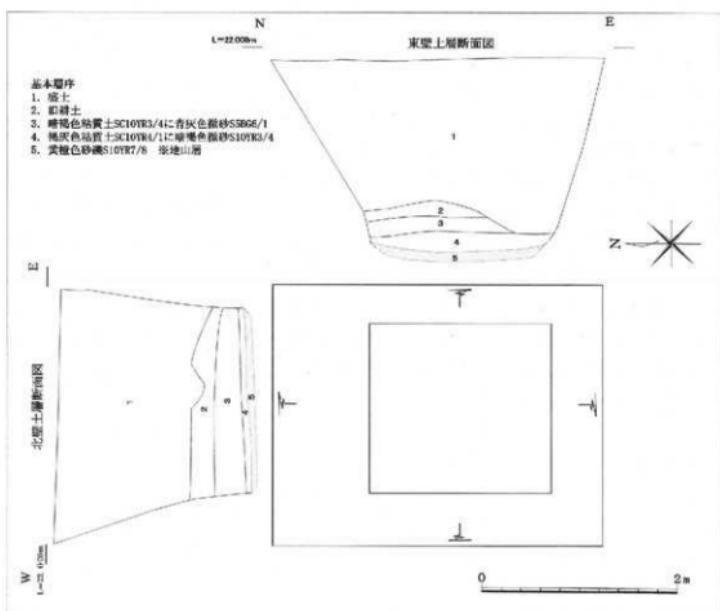
検出遺構 今回の調査において検出された遺構は、第1面、第2面と生活面は押されたのであるが、遺構は検出されなかった。

出土遺物 今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド（縦14cm×横36cm×奥行き56cm）に換算して1箱分である。その種類と内訳は、中世頃の羽釜の破片や須恵器の壺の破片などの遺物が出土している。

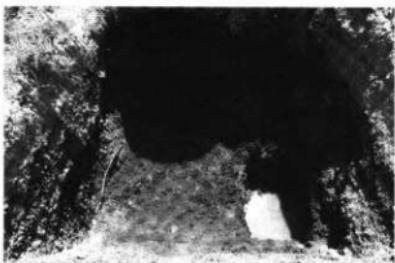
まとめ 今回の調査から、生活面は押されたが、遺構は検出されなかった。生活面の希薄な地域であった事が伺い知れる。

参考文献

『わがまち茨木・城郭編』 昭和62年3月 茨木市・茨木市教育委員会



第77図 調査区平・断面図



第1造構面 検出状況（北より）



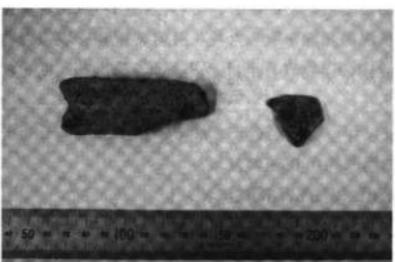
第2造構面 検出状況（北より）



調査区 東壁土層断面



調査風景（北西より）



第1造構面上に包含層内、出土遺物



第2造構面上に包含層内、出土遺物

第78図 造構検出状況・出土遺物

19. 上中条遺跡

所在地 茨木市上中条一丁目61-3

開発事業 個人住宅建設事業

調査期間 平成22年10月1日

調査面積 約19m²

調査担当 富田 卓見

調査結果

経過 上中条遺跡は、茨木市内平野部のほぼ中央部に位置し、上中条一丁目を中心に広がる弥生時代～中世にかけての複合遺跡である。遺跡範囲は、東西約150m・南北約400mを測る。当遺跡周辺には、西側を走るJR東海道本線を挟み、弥生時代～古墳時代の当地周辺の中心的集落であった郡遺跡の分村とされる春日遺跡・倍賀遺跡がある。東側には、元茨木川を挟み、茨木城跡や近世町家の古い町並みが現存している茨木遺跡があり、古代から中・近世にかけての人々の生活の痕跡が確認されている。

当地一帯は、JR東海道本線と阪急京都線の間に位置する立地の良さから、早い時期から住宅地化された。主に個人住宅での調査が多く、各調査面積も狭いため遺跡の全容は掴みにくいが、平成6年度に行なわれたマンション建設に伴う調査では、古墳時代前期初頭（庄内式併行期）の方形周溝墓や、中世の掘立柱建物を検出している。

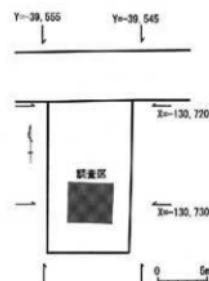
調査方法 調査地の建物建設予定部分に約4.5m×約4.2mの調査区を設定し、重機にて盛土と旧耕土を掘削、その直下の包含層も地山上面まで重機で掘削し、その上中から遺物を探集した。その後、人力にて地山上面を精査し平面状況の記録を取った後、SD-1の記録を取るために北壁西側・西壁際にトレンチを設定した。SD-1内の遺物取り上げと溝底面を確認後、北・西壁面にて土層断面を記録した。

基本層序 現状況で、GL-約0.6mが宅地造成に伴う盛土が造成されていた。GL-約0.6～0.75mが旧耕土(5B6/1青灰色粘質土)、その下で層厚約0.05mの包含層(7.5YR6/2灰褐色粘質土)を検出した。地山(2.5Y7/6明黄褐色粘土)は、包含層直下のGL-約0.8mで確認された。地山上面の様相から、時期は不明であるが過去に削平を受けたものと推測される。

検出遺構 SD-1調査区の西半部分で検出した溝状遺構である。ほぼ南北の方向に直線ぎみに延びており、検出時で最大幅約2.3m・最大長約3.8mを測る。検出したのは溝の東半で、西半は調査区外にあるため確認できなかった。調査区西壁面に沿ってトレンチを設定したところ、地面から深さ約0.6mで底面を確認した。北壁土層断面によると、溝壁はややきつめの傾斜で、底面から約0.1mの高さで軽く段をもつ形状である。調査期間の都合上、溝埋土

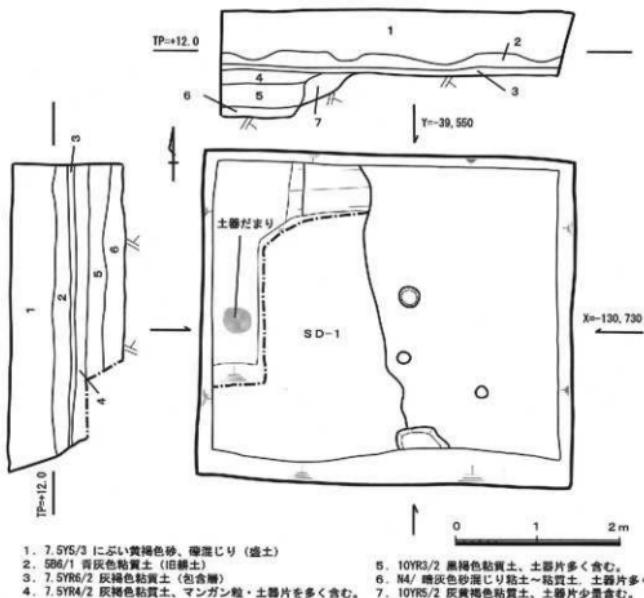


第79図 調査地位置図



第80図 調査区位置図

(S=1/500)



第81図 調査区平面・土層断面図 (S=1/60)

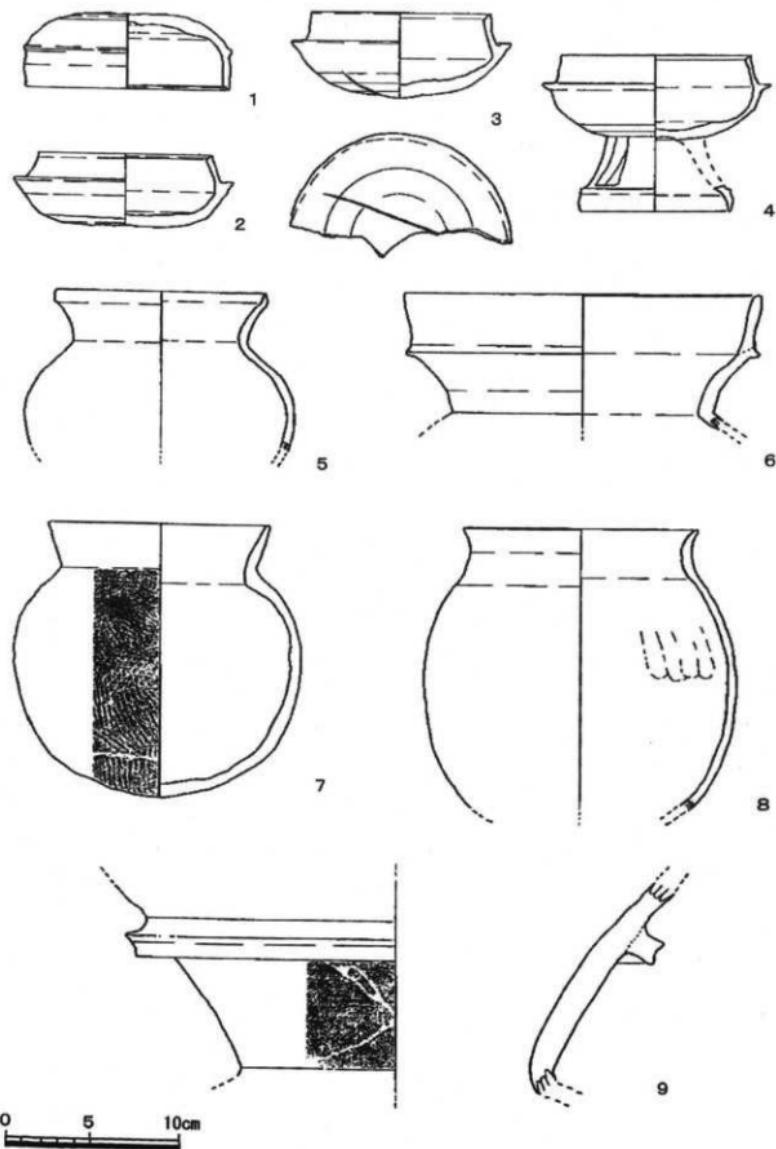
を完掘することができなかつたため全体の様相は不明である。

トレンチ部分の埋土内から、畿内V様式～庄内期の土器や、古墳時代中期後半頃と推測される須恵器坏身・坏蓋や埴輪片などを含む多量の土器片を検出、また、平面検出状況がほぼ直線であることから、方墳の周溝である可能性が高い。SD-1の東側では平坦な地山面が検出されており、方墳のマウンド部は当調査区の西側にあったと考えられ、今回検出した箇所は方墳周溝東辺の中央部分と推測される。

遺構埋土は上層（7.5YR4/2灰褐色粘質土、マンガン粒多く含む）・中層（10YR3/2黒褐色粘質土）・下層（N4/暗灰色砂混じり粘土～粘質土）の3層に大別でき、各層から多くの土器片を検出した。土層断面観察での土器片の含有量の差は、上層>中層>下層の順に多い様相である。各層の遺物に時期差がみられるが、調査期間の都合上、上層と中層の遺物はほぼ一括で取り上げざるを得なかった。

出土遺物 SD-1 SD-1内から多くの土器片を検出した。遺物量は、トレンチ部分のみでコンテナ箱約3箱分にのぼる。

1は須恵器坏蓋、2・3は須恵器坏身である。3は底部にヘラ状工具による先刻が施されている。ともに5世紀末頃のものと思われる。4は須恵器高杯で、SD-1の底付近より検出した。5は須恵器小型壺で、4・5とともに6世紀前後のものと推測される。6は二重口縁の土器壺か壺で、胎土や口縁形状から、山陰系土器の可能性がある。上層付近で検出した。7は土器丸底壺で、外面は粗いハケメで調整されている。中層付近の土器だまりにて、2と隣接して出



第82図 SD・1内 出土遺物 (S=1/3)

土したことから、杯身と同時期の5世紀末頃のものと思われる。8は土師器小型壺である。9は埴輪で、残存部形状から朝顔型埴輪の口縁下部と思われる。外面は横ハケで調整されており、タガはM字断面形状で、しっかりした作りである。

今回図化はしていないが、他にも上層付近では、畿内V様式～庄内期の壺や小型壺の底部、高坏などの土器片を検出した。

まとめ SD-1は、溝底付近より検出した遺物や平面・断面状況から、古墳時代中期後半頃の方墳の周溝である可能性が高い。古墳時代中期後半の遺物を含んでいた中・下層よりも上位の層に、畿内V様式～庄内期頃の遺物を伴う層が存在する点に疑問が残るが、自然堆積で埋没したのではなく、当該期の遺物を含んだ土を他所から運び、人为的に埋めたものと推測される。

冒頭でも述べたが、当地一帯には周辺の既往の調査で弥生時代後期～庄内期と古墳時代後期に墓域があったであろうと推定されているが、個人住宅建築に伴う小規模の調査が多く、まだ詳細な状況を把握できるほどの調査を行っていない。今後の周辺での調査に期待したい。



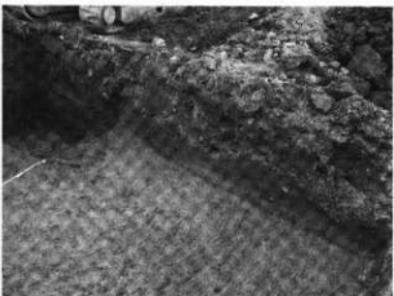
調査完掘状況（南東より）



SD-1 土器だまり検出状況



西壁 土層断面状況



北壁 土層断面状況

第83図 調査状況

20. 倍賀遺跡

所在地 茨木市春日五丁目49-15

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年10月15日

調査面積 約12m²

調査担当 関 梓

調査結果

経過 倍賀遺跡は茨木市の中央部、千里丘陵からのびる低位段丘と茨木川が形成した扇状地に位置し、範囲は南北約0.5km、東西1kmをはかる。遺跡の北西部を弥生時中期から後期にかけての方形周溝墓や住居址・井戸・溝や古墳時代の古墳などが確認された郡遺跡と、南西部は弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡である春日遺跡と接している。

倍賀遺跡については、既往の調査事例が少なく遺跡の詳細な内容は確認されていないが、平成4年度の発掘調査で弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代の集落跡、また中世の井戸などが確認されている。

周辺遺跡の春日遺跡や郡遺跡の様相などから、古墳時代中期から後期において遺跡の規模がもっとも大きくなることがわかっており、近隣の遺跡とともに地域の拠点となる集落を形成していたと考えられる。

今回の調査は、個人住宅新築工事に伴い柱状改良工事が現地表面(GL)から-1.75mまで行なわれることから発掘調査が実施されることとなった。

調査区は、調査地の周囲が住宅に囲まれており、敷地面積や掘削土量などの問題から南北約3m、東西約4mと設定した。

基本層序 現地表面は、標高約16.5mをはかる。現地表面から約-0.9mで地山を確認した。層序は、上層より第1層(現代盛土層)が層厚0.6m、第2層(旧耕作土層)が層厚0.15m、第3層(床土)が層厚0.05mであり、その直下で造構面(地山)となる第4層(2.5Y6/6明黄褐色粘性砂質土に2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック状に混じる)を確認した。今回、包含層に相当する層は確認されず、地山の上層部分にはブロック状に粘土が混入している状況などから、後世において削平をうけているものと考える。

検出遺構 今回の調査では、第4層(地山)において柱穴1基(SP01)を検出した。造構を完掘したところ底の形状が二段落ちになってしまっており、柱根などは残っていなかったが柱穴の可能性が高いと考える。

遺構の時期は、埋土からは須恵器や土師器といった土器片



第84図 調査位置図



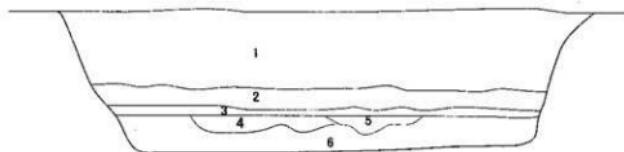
第85図 調査区配置図

T.P.+16.800m

W

Y=39,992

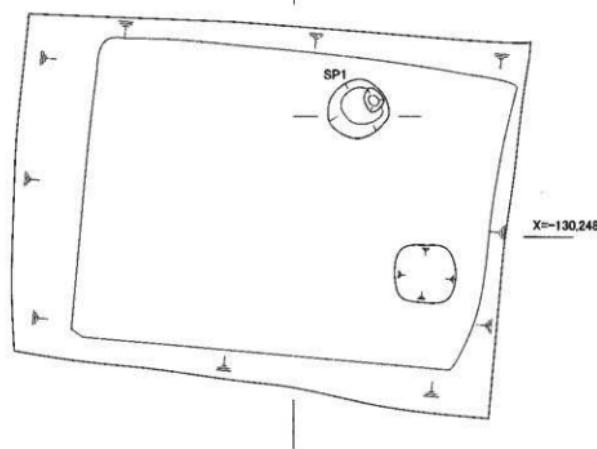
E



1. 盛土
2. 旧耕土
3. 床土
4. 10YR3/1黒褐色粘質土に5Y6/2灰オリーブ色粘土ブロック状に含む
5. 5Y4/1灰色粘土に5Y6/3オリーブ黄色粘土ブロック状に含む
6. 2.5Y6/6明黄褐色粘土(地山)



Y=-39,992



SP01

T.P.+16.500m

W

E

1. 2.5Y2/1黒色粘質土にN3/0暗灰色粘土ブロック状に含む



第86図 平面・断面図

が数点出土したことから古代末から中世に相当すると考えられる。

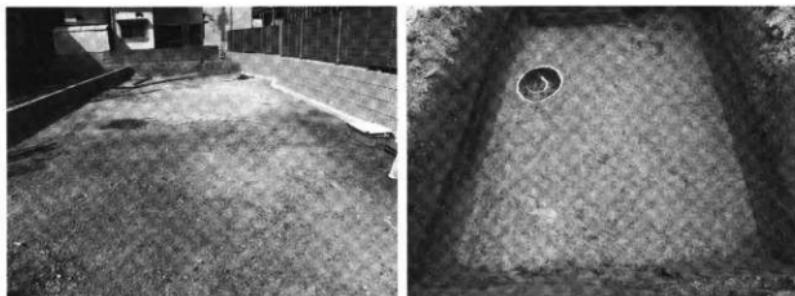
出土遺物 出土遺物は、柱穴（SP01）の遺構埋土から土師器・須恵器の破片が数点出土したのみであった。須恵器片から、時期は古代末から中世の範疇におさまるものと考えられる。しかし、土器片はいずれも細片であり図化することができなかった。

まとめ 今回の調査地では、後世の時代による削平をうけてはいたものの古代から中世に相当する遺構を確認することができた。調査面積が狭く得られた情報も少ないが、この地域の様相を考える一資料となったと考える。

今回の調査地が位置する倍賀遺跡の南東部、春日遺跡との地域は、近隣での調査事例が少なく、遺跡の様相が明らかになっていない地域である。今後の調査成果の増加に期待したい。

参考文献

『倍賀遺跡発掘調査概要報告書 - 平成4年度発掘調査概報 -』 1993年 茨木市教育委員会
『平成8年度発掘調査概報』 1997年 茨木市教育委員会



調査地全景（東から）

遺構面（地山）完掘状況（西から）

第87図 発掘調査風景

21. 茨木遺跡

所在地 茨木市元町1530-9・1530-10

開発事業 個人住宅建設事業

調査期間 平成22年10月29日

調査面積 約12m²

調査担当 富田 卓見

調査結果

経過 茨木遺跡は、阪急電車茨木市駅北西側に所在し、上泉町・元町・本町・片桐町・宮元町・大手町にかけての東西約300m・南北約700mの範囲に広がる、弥生時代から中・近世の集落遺跡である。当遺跡は、中世の茨木城跡として知られており、現在でも近世の古い町並みが一部に残っている地域である。また、天正期に茨木城主であった戦国大名・中川漸兵衛清秀の菩提寺「梅林寺」も、当遺跡内に所在する。

当地周辺は早い時期から市街化され、近年の再開発に伴う

発掘調査で、遺跡の詳細が徐々に明らかになってきている。文献や地割り・字名から、当遺跡内に茨木城が存在していたことは既に判明しているが、当時の町構造や城・堀などの正確な配置はまだ判明していない。平成18年度に行なわれた調査では、城の堀と推定される大溝を検出し、その埋土内から中世の織豊期のものと思われる「おさ欄間」などの建具や、床板・化粧板などの部材を検出した。この部材が茨木城に直接関係するものであるかは不明であるが、保存状態も良く、当時の建築・内装状況を知るために一級の資料と言えよう。平成13年度に遺跡南部にて実施した調査では、中・近世に暗渠排水に使用されたと推測される瓦製土管列を検出した。

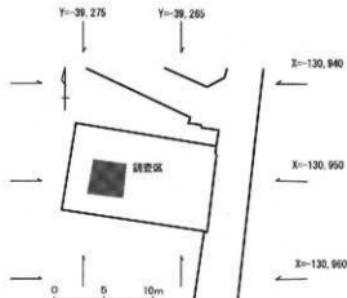
今回の調査地は、茨木遺跡西部のやや南方で、「江戸文化年間撰州茨木図」記載の鍛冶屋町(六間町)、「明治六年茨木村地租書上帳」記載の六軒町にあたる地字の北端に位置している。西隣地には茨木神社が所在する。

調査方法 調査地内に約3.5m×約3.5mの調査区を設定し、重機によって盛土を除去後の第1面を精査、写真・図面等の記録作業を行った。調査日数の都合上、第1面以下の層での調査は行わなかった。

基本層序 現地表面から約0.3~0.5mが現代の盛土で造成されていた。盛土直下のにぶい黄色(2.5Y6/4)粘質土層上面より、調査区南西角で井戸状遺構造成時の掘り込みを確認した。その下に灰褐色(10YR5/2)砂混じり粘質土層、にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂層が続き、にぶい黄褐色細砂層上面にて、調査区東部から南部にかけて広がる明黄褐



第88図 調査位置図



第89図 調査区配置図

(S=1/500)

色(10YR6/6)粗砂の洪水堆積層を検出した。洪水粗砂は、調査区東壁上面で層厚約0.6m以上を測る。さらに下層では、褐灰色(10YR6/1)炭化物を含む砂混じり粘質土層、灰色(5Y5/1)粘質土・砂礫を多く含層、青灰色(5BG6/1)粘質土層と続く。平面検出は、褐灰色(10YR6/1)炭化物を含む砂混じり粘質土層上面にて行なった。

検出遺構・遺物 調査区東部～南部が洪水砂によって削られており、その影響を受けていない北部と南西部にて、溝(SD)2本・ピット状遺構(SP)2個・井戸状遺構(SE)1基を検出した。

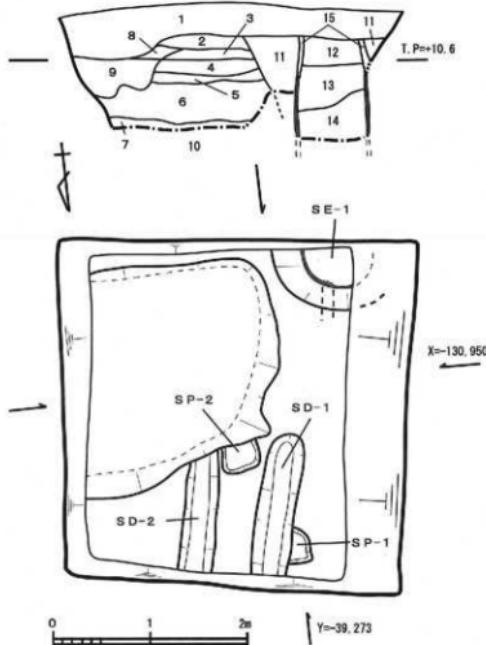
溝は、SD-1・SD-2ともに南北方向に延びており、SD-2の南端は洪水砂によって切られていた。溝幅は、SD-1が約0.37m、SD-2が約0.35mを測る。深さは、ともに約0.1mで、全長は残存部で約1.48m・約1.2mである。SD-1からは、比較的新しい時期の土器片を出土した。

SP-1は、SD-1に切られており、残存部で径約0.35m・深さ約0.13mを測る。SP-2は、残存部で径約0.38m・深さ約0.09mを測る。

埋土は洪水砂である明黄褐色粗砂

で構成されていることから、洪水時に削られた窪みに、洪水砂が堆積したものであろう。

SE-1は、木枠を伴う井戸状遺構で、径約0.75mを測る。遺構埋土掘り下げ最中、GL-約1.2mの地点で湧水が多くなってきたため、完掘できなかった。土層断面観察では、下部に設置した木枠片の延長上部に、黄橙色粘質土で同様の枠らしきものを構築した跡が確認された。木枠内埋土は3層に大別でき、その下層から廃絶時に投げ捨てられたと思われる瓦片や陶磁器細片を検出した。井戸状遺構の掘り込み面が盛土層直下であり、検出した遺物も新しい様相であることから、近世後半～現代の比較的新しい時期まで使用されていたものと推測される。木枠内埋土を掘り下げていくと、木枠北側板で竹管の導入口を確認した。そのまま北方向へ竹管が延びて埋設されていると思われる。



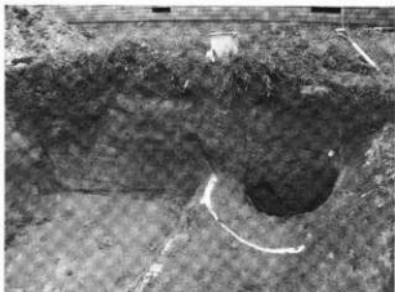
1. 2.5Y4/2明黄褐色砂質土、雜多含（盛土）
2. 2.5Y6/4にぶい黄色粘質土
3. 10Y5/2褐色、砂混じり粘質土
4. 10Y8/3にぶい黄褐色細砂
5. 10Y8/1褐色砂混じり粘質土、炭化物少含
6. 5Y5/1灰色粘質土、砂礫・礫分斑多含
7. 5BB6/1青灰色粘質土
8. 2.5Y7/4黃褐色粗砂
9. 2.5Y7/4黃褐色～5Y5/6明赤褐色粗砂～細砂
10. 10Y6/6明褐色粗砂（洪水砂）
11. 2.5Y6/1黃褐色粘質土、雜少含
12. 2.5Y7/2青灰色粘質土、雜多含
13. 10Y8/4にぶい黄褐色粘質土、褐色粗砂ブロックを多含
14. 10BB6/1青灰色粘質土、雜多含
15. 7.5Y7/8黃褐色粘質土

第90図 調査区平面・南壁土層断面図 (S=1/50)

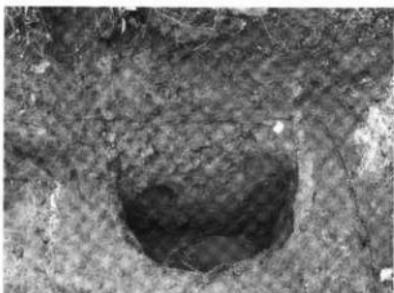
まとめ 今回の調査で、近世後半頃と推測される井戸状遺構と、それに繋がる竹管水道の存在を確認した。当地一帯は、遺跡西部を流れていた元茨木川の氾濫を受けて洪水砂が堆積しており、地下に水を多く含んでいるため、水が湧きやすい状況である。今回の調査地にごく近い既往の調査においても同様の竹管が確認されていることから、比較的新しい時代まで今回確認したような井戸状遺構や竹管水道を町内に巡らし、計画的に排水管理を行なっていた様子がうかがえる。期間の都合上、さらに下位の層での調査はできなかったが、下層には茨木城が使用されていた中世の層が存在している可能性が高い。今後の周辺での調査に期待したい。



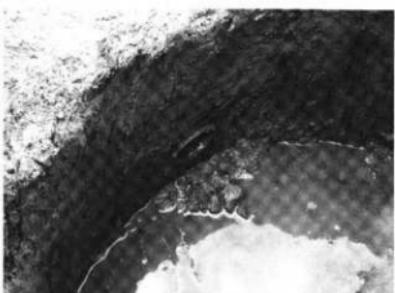
調査完掘状況（北より）



南壁土層断面状況



井戸状遺構（SE-1）土層断面状況



井戸状遺構 北側板 竹管導入口アップ

第91図 調査状況

22. 安威城跡

所在地 茨木市安威二丁目2013番・2324番

開発事業 個人住宅建設事業

調査期間 平成22年11月24日～25日

調査面積 2カ所・計約18.5m²

調査担当 富田 卓見

調査結果

経過 安威城跡は、茨木市北部に広がる山間部の南側で、安威川右岸の西側に広がる段丘崖上に位置しており、遺跡範囲は、東西約360m・南北約700mを測る。当調査地一帯は、中世の「安威城跡」が所在していたと推測されている地域である。遺跡内には古い集落の町並みが残っており、遺跡東部の段丘崖にも、城外郭のものと思われる土塁が残存している。今回の調査地は、安威城の外郭北辺と推定される部分に隣接している位置に所在する。

当遺跡周辺はかつて中臣氏の所領地であり、東側を流れる安威川を挟んだ北東部の山頂付近に、中臣鎌足の墓である可能性が高いとされている阿武山古墳が所在する。また北方には、905年（延喜5年）に完成した「延喜式」の神名帳にその名が記載された式内社の1つである阿為神社が所在する。阿為神社は中臣藍連の氏寺とされ、当遺跡の南西に所在していた将軍山古墳出土と伝えられている三角縁二神二獸鏡が収められている。また、阿為神社と安威遺跡（安威城跡）の間には安威寺跡推定地が存在するが、寺院の詳細も含め、その正確な位置などはまだ判明していない。

今回の調査地の西隣で、平成14年に行なわれた安威公民館建設に伴う発掘調査では、近世のものと思われる柱穴・土坑・井戸を検出した。平成22年に当調査地東隣にて行なわれた発掘調査では、中世～近世のピットや土坑、陶磁器片などの遺物を検出した。当地周辺での既往の調査事例は少なく、安威城跡の正確な位置や城内構造などは不明である。

基本層序 現地表面から約0.2～0.4mが現代の盛土で造成されていた。盛土直下には、にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土・小～大礫多含層(層厚約0.2m)がある。その下に、褐色(10YR4/4)砂・小～中礫多含層が続き、この層の上面にて遺構検出を行なった。

検出遺構 調査地内で南北それぞれ調査区を設定し、南側をA区、北側をB区と呼称した。両区



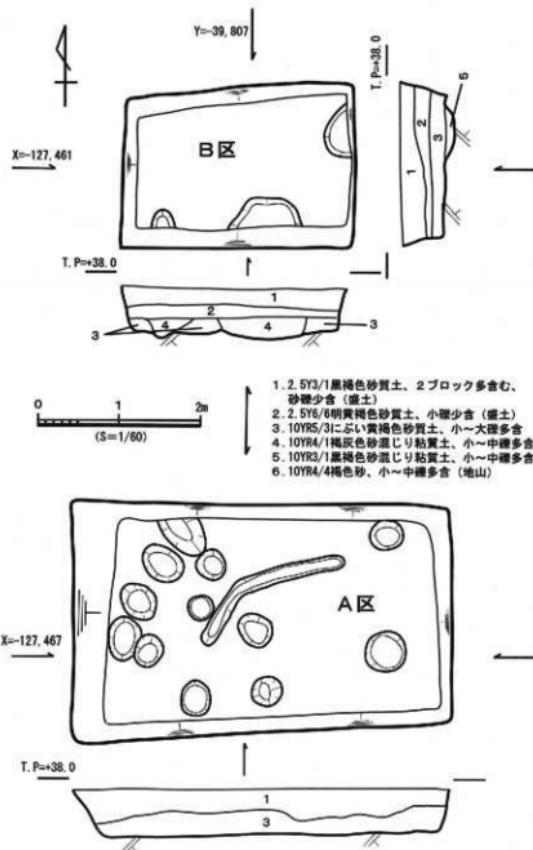
第92図 調査位置図



第93図 調査区配置図 (S=1/500)

合わせて、ピット状遺構15個・溝状遺構1本を検出した。どの遺構も残存深度が浅く、過去に削平を受けたものと思われる。B区の東・南壁面土層断面状況にて、掘り込み面より遺構が2時期に大別できることが判明したが、調査全体を通して遺物を検出しなかったため、各面の時代は不明である。

まとめ 今回の調査で、ピット状遺構15個・溝状遺構1本を検出した。遺物を検出しなかったため時代は不明であるが、今回の調査地が安威城外郭推定部分の北側に隣接し、また、西隣で行なわれた既往の調査にて近世の遺構を検出していることから、中世終わり頃～近世頃のもとのと推測される。今後の周辺での発掘調査によって、安威城の詳細が明らかになることに期待したい。



第94図 調査区平面・土層断面図



第95図 遺構完掘状況（左：A区南西より・右：B区北西より）

23. 目垣遺跡

所在地 茨木市目垣一丁目8-6

開発事業 個人住宅新築工事

調査期間 平成22年11月30日～12月1日

調査面積 24m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

経過 目垣遺跡は、目垣一丁目～三丁目にかけてやや不整形ながら、南北約0.68km×東西に約0.36kmに広がる、弥生時代前期から中世にかけて継続的に営まれた複合的な集落遺跡として知られる。目垣遺跡の立地条件として、安威川東岸及び淀川西岸に挟まれた標高約1～2mの低湿地上に立地している。昭和48年に電力会社の送電線用の鉄塔工事の際に、弥生土器が出土した事が遺跡発見の契機となった。また、平成9年度の調査では縄文時代晚期後半頃の深鉢の破片（船橋式）

が見つかっており、なかでも特筆すべき遺

物として人面付き土器が挙げられる。この人面付き土器は、壺（弥生時代中期後半頃）などの日常什器と一緒に供伴する形で土壤遺構から出土したものである。この他に大型石包丁や大型蛤刃石斧、偏平片刃石斧、偏平片刃石斧といった石製品ものが出土している。その後は、古代から中世頃にかけて土豪であった溝杭氏がこの地を支配していたとされる。なお、目垣遺跡の包蔵地面積は、約13万4千m²となる。

今回の調査では、主に中世頃の生活面を調査の対象とした。平成22年度の目垣遺跡での調査は第2次目となる。

基本層序 基本層序については、第1層～第10層に大別する事ができる。層序は上層より順に、第1層は現代の造成盛土を含む層で、層厚は概ね0.4mを測る。第2層は、オリーブ褐色砂質土SCL2.5Y4/6の土性を持つ、層厚約0.5mの層である。第3層は、オリーブ褐色砂質土SCL2.5Y4/3を主体とし、明黄褐色微砂S2.5Y6/6の土性を持つ、層厚約0.4mの層である。第4層は、にぶい黄褐色砂質土SL10YR4/3を土性に持ち、層厚は概ね0.35mを測る間層となる。第5層は、黒色粘質土SC10YR2/1を土性に持ち炭化物を含む、層厚約0.05mを測る。第6層は、灰色砂質土SCL5Y5/1を土性に持ち、マンガンを含む層である、層厚は、概ね0.25mを測る。第7層は、灰オリーブ色粘性砂質



第96図 調査位置図



第97図 調査区配置図

土CL5Y5/2を土性に持ち、層厚は、概ね0.45mを測る。第8層は、灰色砂質土SCL5Y5/1を土性に持ち、マンガンを含む層である、層厚は、概ね0.25mを測る。第9層は、灰色粘性砂質土CL10Y4/1を土性に持ち、層厚は約0.3mを測る。第10層は、暗灰黄色砂質土LS2.5Y5/2を土性に持ち、層厚は約0.4mを測る層となる。

検出遺構 現地表面は、約5.9mを測る。第1遺構面では、溝状遺構2条、土壙遺構1基、使途不明遺構1基を検出した。存続時期については、出土した遺物より中世終わり頃から近世の初期頃に比定できる。第2遺構面では、東西方向に走る溝状遺構2条を検出した。土壙遺構1基、使途不明遺構1基を検出した。存続時期については、出土した遺物より中世終わり頃に比定できる。第3遺構面では、溝状遺構1条、土壙遺構1基、ピット状遺構1基を検出した。存続時期については、出土した遺物より中世終わり頃から近世の初期頃に比定できる。

出土遺物 今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド（縦14cm×横36cm×奥行き56cm）に換算して1箱分である。その種類と内訳は、13世紀後葉頃の瓦器・陶器・土師器皿、14世紀後葉頃の土師器皿等が出土している。

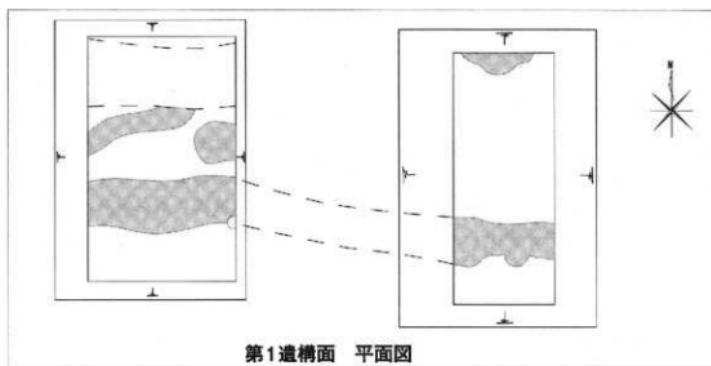
まとめ 今回の調査では、13世紀後葉頃から14世紀後葉頃にかけての生活遺構面を検出した。土豪であった溝杭氏が、この地を支配していたとされる時に重複する。なお、当調査地は堀や塁に囲まれたいわば「外郭」に推定される地域になる。

参考文献

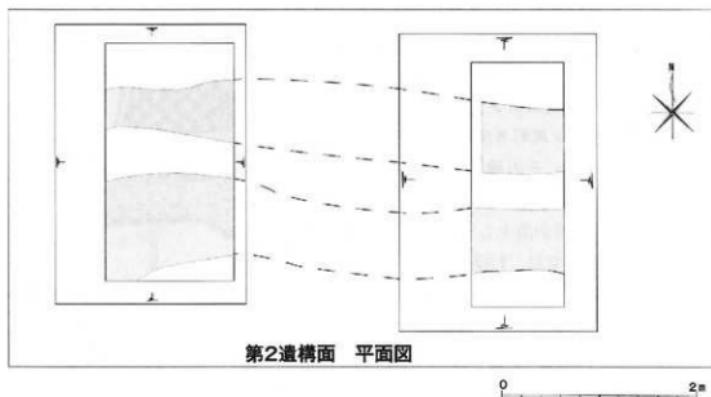
『わがまち茨木・城郭編』 昭和62年3月 茨木市・茨木市教育委員会



第98図 目垣城跡推定位図



第1遺構面 平面図

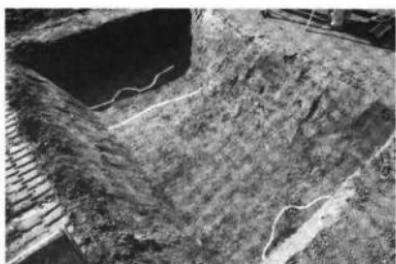


第2遺構面 平面図

0 2m

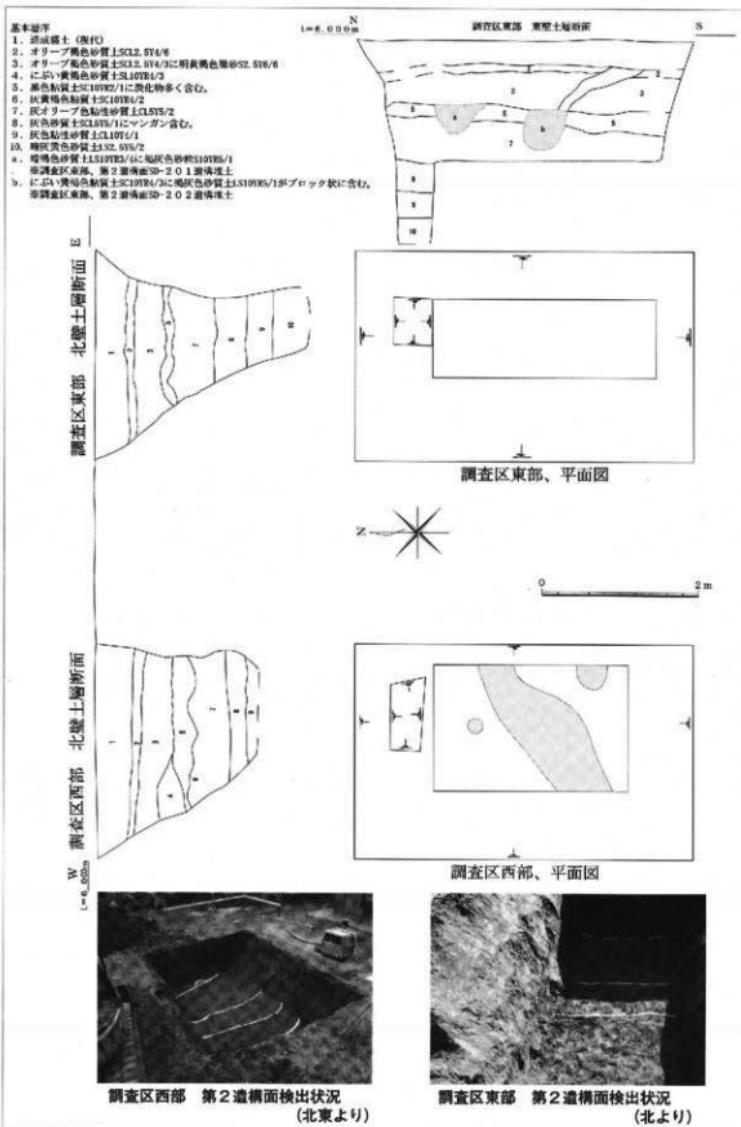


調査区西部 第1遺構面検出状況
(北東より)

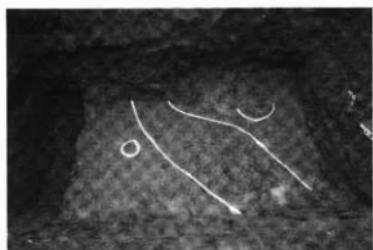


調査区東部 第1遺構面検出状況
(北東より)

第99図 第1・第2遺構平面図、遺構検出状況



第100図 遺構平面図、調査区北・東壁土層断面図



調査区西部 第3遺構面、遺構検出状況
(西より)



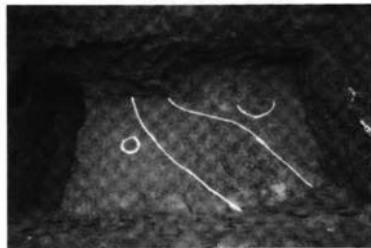
調査区東部 第3遺構面、検出状況
(南より)



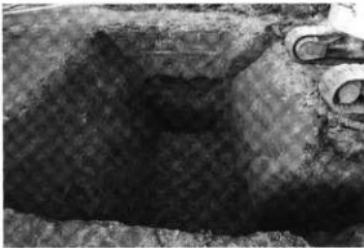
調査区東部 北壁土層断面



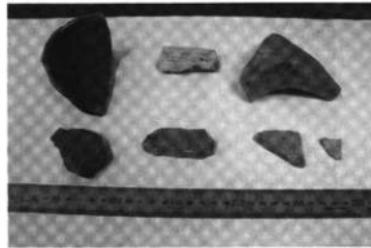
調査区東部 東壁土層断面



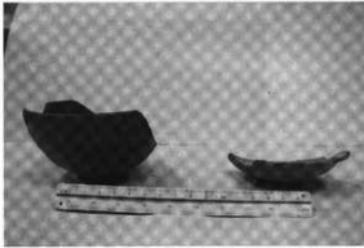
第2遺構面上包含層内、出土遺物



第3遺構面上包含層内、出土遺物 1



第3遺構面上包含層内、出土遺物 2



第3遺構面上包含層内、出土遺物 3

第101図 遺構検出状況・出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな 書名 著者名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 施設登録番号 地名・地番 年月日 所収遺物名	松井さくらはらきこへいにゅうにれんどほくつとうがいはう、こじんじゅうたくわんちくにともなうほくつちとうきほっこく・大熊町出土平安成治25年度祭祀陶器等概観 -個人仕事叢書に伴う施設開発報告-					
中澤 2 年度 (2010 年度)						
中澤 2.0.1 年 3 月 31 日						
中澤 2.0.1 年 3 月 31 日						
所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
中澤町 855-1	27211	82	34°48'40"	135°34'50"	20100216	7.0 m ²
本町 1393	27211	104	34°49'10"	135°34'25"	20100306	15.0 m ²
人丁町 1694	27211	104	34°49'00"	135°34'21"	20100324	12.5 m ²
安政城跡 安政二丁目 2012	27211	66	34°51'1"	135°33'54"	20100426	24.0 m ²
片瀬町 1071-4	27211	104	34°48'9"	135°34'16"	20100511	14.0 m ²
常楽寺跡 截垣内三丁目 408	27211	54	34°47'38"	135°33'24"	20100601	12.0 m ²
春日四丁目 508-4, 280-3	27211	82	34°49'26"	135°33'54"	20100630	7.6 m ²
東奈良 人丁二丁目 589-29	27211	65	34°48'4"	135°33'45"	20100702	9.0 m ²
中条小学校 東貝町 584-4, 584-8	27211	52	34°48'30"	135°33'57"	20100714 ~	8.0 m ²
中澤 14-33	27211	82	34°48'49"	135°34'55"	20100720	9.0 m ²
春日・倍賀 春日九丁目 46-7	27211	60	34°49'27"	135°33'44"	20100726	9.0 m ²
太田茶臼山古墳 人田三丁目 158-1	27211	26	34°50'46"	135°34'43"	20100726	10.0 m ²
中条小学校 下人条町 122-4, 122-6	27211	52	34°48'49"	135°33'55"	20100816 ~	56.0 m ²
中澤 855-3	27211	82	34°48'60"	135°34'51"	20100818	12.0 m ²
耳原 耳原・丁目 487-14, 494-8	27211	31	34°50'21"	135°33'57"	20100819	12.0 m ²
日垣 日垣二丁目 746-6, 743-7	27211	58	34°48'26"	135°35'38"	20100823	8.3 m ²
横堀 五十鈴町 245-9	27211	51	34°48'47"	135°35'19"	20100831	11.0 m ²
太田城跡 大田一丁目 617-5	27211	67	34°50'21"	135°34'34"	20100913	8.8 m ²
上中条 上中条一丁目 61-3	27211	56	34°49'15"	135°34'41"	20101001	19.0 m ²
伊賀 春日五丁目 49-15	27211	47	34°49'27"	135°33'46"	20101015	12.0 m ²
茨木 元町 1530-9, 1530-10	27211	104	34°49'8"	135°34'15"	20101029	12.0 m ²
安政城跡 安政二丁目 2013, 2324	27211	66	34°51'1"	135°33'53"	20101124 ~	18.5 m ²
日垣 日垣一丁目 8-6	27211	58	34°48'21"	135°35'38"	20101130 ~	24.0 m ²
日垣 2010.12.01						
所収遺物名	特別	生時代	主な遺構	主な土器	特記事項	
中澤 集落跡 古墳時代	土器	土器	土器	半世紀代・中期の漆器と土器上		
茨木 集落跡 近世時代	土壇	瓦片・枯土塊		高さ尾に火を受けた痕跡		
茨木 集落跡 近世時代	土	土器標痕片		あり		
安政城跡 城跡 道路時代	土壇・ビット		陶磁器片・土器質土器・近世瓦			
茨木 奥落跡 文化時代	水路・杭列・溝		陶磁器・近世平瓦・深鉢			
常楽寺跡 社寺跡 古墳時代	溝		陶磁器・瓦			
中澤 集落跡 中世時代	土壇・ビット		土器器・陶磁器・中世瓦			
東奈良 集落跡 近世時代				遺構・遺物を検出せず		
中条小学校 集落跡 中世時代	土壇・ビット・有飾頸足器	土器器・灰毛器・陶磁器				
中澤 集落跡 古墳時代	ビット					
中澤 集落跡 中世時代	淡水洗跡か	土器器片・瓦器片・陶磁器片		洗い場跡付近に下る		
耳原 集落跡 古生時代	溝	弥生土器		洗い場跡付近に下る		
日垣 安落跡 古生時代	溝・土壇・ビット	土器器・灰毛器・陶磁器		洗い場跡付近に下る		
横堀 安落跡 古生時代	近世水田跡	土器器片・陶磁器片・瓦片		洗い場跡付近に下る		
太田城跡 城跡 開拓時代			土器器・須恵器片			
上中条 集落跡 小石切時代	溝	弥生土器・十輪器・須恵器・地輪片				
伊賀 集落跡 在住時代	柱穴	土器器片・須恵器片・陶磁器片				
茨木 集落跡 近世時代	溝・ビット・竹質溝	土器器・瓦				
安政城跡 城跡 強化時代	ビット・縄			遺物を検出せず。		
日垣 集落跡 古墳時代				既にされた遺物の状態と見合うものも見当た		

平成 22 年度発掘調査概報
— 個人住宅建築に伴う発掘調査報告 —

発行日 平成 23 年 3 月 31 日
発 行 茨 木 市 教 育 委 員 会
印 刷 所 株 式 会 社 ト ュ ュ ー

